

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

## The Formation of Western Type Clothes : Comparison with the Japanese Clothes

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大丸, 弘 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15021/00003771">https://doi.org/10.15021/00003771</a>

### 3. 西欧人による西欧型服装認識

#### 3-1 分析の方法と対象

西欧人が、彼らの服装と衣文化の特質を、どのように認識しているかを知るためには、ふたつの方法があると思う。

そのひとつは、いうまでもなく、彼ら自身の観察と分析による、比較服装論としての、西欧服観にきくことである。西欧において、そうした態度での西欧服装とのとりくみが、学問的に行われるようになったのは、1930年代、Tilke, Bruhn 等の業績以後のことではないだろうか。

第2の方法は、とりたてて他の文化との比較という意図をもたず、彼らが自己の服装を、あるいはまた服装一般についてのべた内容を、われわれが一定の基準から批判し、彼らがいわば無自覚的に示した西欧服観を、拾いあげることである。

以下、本稿の後半で試みるのは、この第2の方法ではあるが、その場合私もちい

53) 同様な例—B.N. Ms <Les Noces de Cana> par Jacquemart de Hesdin. 本例では女性が肩口に造花を飾っている。また Fra Angelico の <Annunciacion> St. Marco, Firenze では、天使が肩口にリボン飾りをつけた例がある。

54) detachable sleeves の覆いとしてのエポレット、という考え方は当らない。発生的には逆の順序である。

表7 素材の物性と持上り高さの関係

	メルトン	サー ジ	ツイード	ギンガム	綾羽二重(白絹)
厚 さ (mm)	1.70	0.56	0.81	0.34	0.19
密 度 (/cm)	15×17	26×27	11×10	29×20	50×39
好適いせこみ量 (cm)	4.5	2.8	3.5	2.3	2.2
持上り高さ (mm)	5.50	3.95	5.00	3.50	3.40

石毛フミ子 1955「袖山のいせこみ分量について」(第2報) 昭和女子大学苑181 p. 61~69

る一定の基準とは、2. において検討した、和服と対比しての、西欧型服装の諸特質である。

\*                     \*                     \*

のちに詳しく提示するように、今回の分析対象は、いわゆる *costume books* である。ただしその対象となる時代を、いつからいつまでとするかが、まず最初の問題であった。サリバンが『ミカド』を上演した1886年という時代、その舞台衣裳においても、それをデザインしたひとびとは、徹頭徹尾、所詮イギリス人でしかないことを、われわれに示している。これに対して1980年の映画『ショーゲン』の中で、すくなくとも衣裳デザインにあらわれたアメリカ的なものを、われわれはほとんど見いだすことができない。西欧人のキモノ認識のなかでも、いわゆる昭和和服期の中で、ことに日本在住が長期間にわたり、半ば日本人的心情に染まっているような人の場合には、その発言の中から、西欧人としての“偏向”あるいは基底認識をさぐりだすことは、困難であったのである。

衣文化についてみるかぎり、西欧服装の世界的な浸透の一方で、それと平行して西欧服の非西欧化が進行した。われわれはその中の重要な契機として、第1次大戦、第2次大戦というステップを踏んでの民族主義的傾向、そしてとくに1920年代とそれ以後における、アメリカニズムを挙げることを知っている。とすれば、われわれは“固有の”西欧服装の純粋さのうえに立っての、彼らの認識を重んじるために、たとえば *belle époque* 以前に、われわれの対象を限定すべきだろうか。

しかしながらこのような試みは、西欧とはなにか、という、いくぶん途方もない議論に、一種の答えを与えることになる。私の当面のテーマについていえば、西欧服装とはなにか、という議論の前提として、その結論めいたものをもちこむことになる。

私が本稿の中で対象としている西欧とは、すでに示したような具体的な西欧服観、すなわち服装としての特色群によってかたちづけられた、衣文化的概念である。そのような特色が、今日においてもなお、日常生活の中へのたしかな浸透と、創造的展開の濃密さによって、生きつづけていることは事実である。『ミカド』の時代と、『ショーゲン』の時代との西欧人の服装観のあいだには、ある落差のあることはたしかであるが、そのような落差を十分許容し変貌しつづける、可塑性に富んだ全体像を、私は文化概念としての西欧服と考えたい。

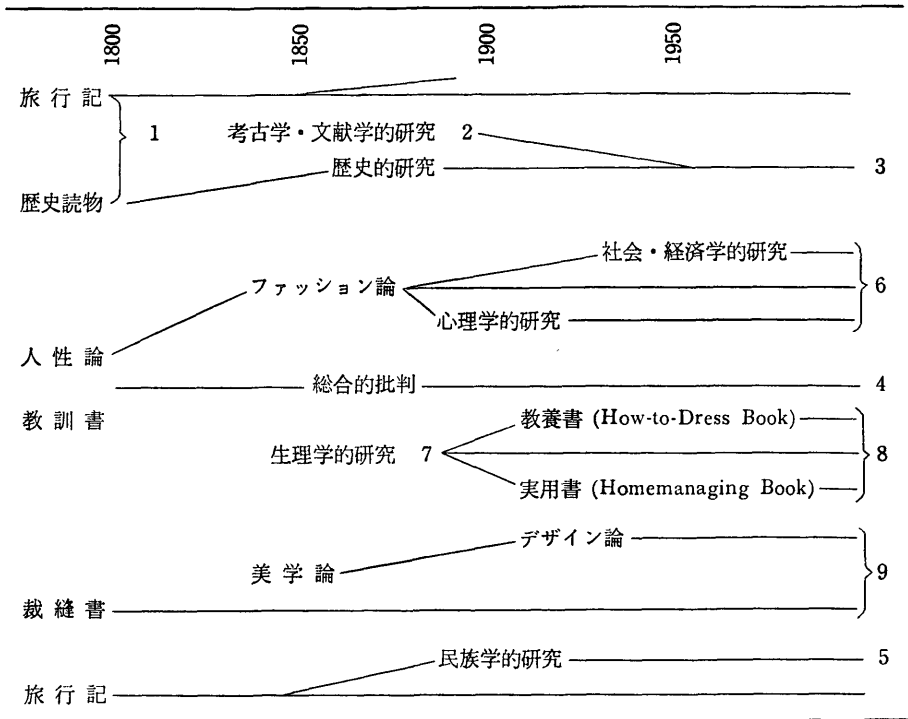
資料の上限を、一応1800年頃としたのは、そのあたりで服装書の絶対数が非常に少なくなり、服装についてのその時代の通念を知るために服装書を用いるという、資料の資料性の点で、問題が生じるためである。

3-2 西欧近代における服装研究のカテゴリー

以下の分析で対象としたのは、Bibliothèque nationale, Paris および British Library, London 所蔵の、主として佛、英両国で1850年以降1980年までに刊行された、服装関連書の大部分と、1900年以降1982年までに発表された、服装関連学術論文中、主要なものである<sup>55)</sup>。

狭義の服装書、すなわち注55で示した英国図書館主題索引における costume 項中の図書は、網羅的にとりあげたが、homemanagement あるいは ethics といった、関

表8 近代服装書のカテゴリー系統



55) 文献選択の方法はつぎのとおりである。図書については、1850年以後の英、佛語書の、おそらく70%は両図書館で重複していると思われるので、British Library における検索方法だけをのべる。

i) 1879年まで Peddie <Subject Index of Books published up to and including 1880> vol. 1~3 & new series, 1933~48.

対象主題 costume, etiquette.

ii) 1880年以後 British Museum Library <British Museum Library Subject Index of the Modern Books> 1966~

対象主題 costume, dress and dress making, needlework, tailoring, etiquette, morals and morality, ethics, homemanagement.

これらの主題でカバーした文献よりの選択基準は、本文中でのべる。

連項目中の服装関係書をもとりあげ、その見解を検討対象としているので、筆者の服装へのかかわりかたにも大きな違いがあり、その内容を同列にとりあげて論ずるわけにはいかない。そこで私は、内容の検討にはいるまえに、対象とした全文献を、9つのカテゴリーに仮に分類した(表8)。この分類によって、たとえば裁縫書の中でのべられている歴史的言及は、原則として無視する、といった、資料の有効性についての、最低の保証が与えられる。

私が文献をこのようにカテゴリー区分したのは、このような資料性への配慮のためだけではない。私はこのあとで、各カテゴリー、すなわち服装の分野別の、おもな関心事、ないし論述の一般的傾向をのべるのであるが、そこでいくぶん、研究史論的なふみこみ方をしている。その理由は、ある分野の筆者たちの関心事とその歴史的展開、また論述の基本的態度の中にも、西欧人の服装観の、たしかな反影が認められると、判断したためである。

## 1. 旅行記・歴史読物

表9 旅行記・歴史読物 (Pass-Time books)

---

MAROLLES	“Habits di diverses nations étrangères—recueil de gravures ayant appartenu à Marolles” 1563?
SPALLART, Robert de	“Tableau Historique des Costumes, des Mœurs et des Usages des Principaux Peuples de L’antiquité et du Moyen Age” (1804)
Beauquier, M. M. F. etc.	“Recueil des Costumes français ou collection des plus belles Statues et figures françaises, des armes, des armures, des instruments, des meubles, etc.” 1810
DALVIMART, Octavian	“Picturesque Representations of The Dress and Manners of the Turks” 1814
An artist recently returned from the Continent	“The characteristic costume of France” 1819
FERRARIO, Jules	“Il costume antico e moderno di tutti i popoli” 1816–1834
WAGNER, Heinrich	“Trachtenbuch des Mittel-Alters” 1830–1834
HERBÉ, (?)	“Costumes français civils, militaires et religieux, depuis les gaulois jusqu’à 1834” (1837)
HEFNER-Alteneck, J. H.	“Trachten des christlichen Mittelalters; nach gleichzeitigen Kunstdenkmalen” 1840–1844
WAHLEN, Auguste	“Mœurs, Usages et Costumes de tous les Peuples du Monde” 1843–1845
LACAUCHIE, A., etc.	“Costumes historiques français civils, —” (1846)
COMPTE-Calix, F.	“Costumes historiques français” 1864

---

- PAUQUET, P. (painted by)  
 "The Book of Historical Costume" 1868
- JACQUEMIN, Raphaël  
 "Iconographie générale et méthodique du costume; du IVe au XIXe siècle (315-1815)"  
 1871
- JACQUEMIN, Raphaël  
 "Histoire Générale du Costume Civile, Religieux et Militaire, du IVe au XIXe siècle" 1876
- CARROTHERS, Julia D.  
 "The Sunrise kingdom; or Life and Scenes in Japan, and Woman's work for Woman there"  
 1879
- HOTTENROTH, F.  
 "Trachten, Haus-, Feld- und Kriegsgeräthschaften der Völker Alter und Neuer Zeit" 1884  
 Geschichte etc.  
 "Zur Geschichte der Kostüme" 1890
- FALKE, Jacob von  
 "Geschichte des Geschmacks im Mittelalter und andere Studien auf Gebiete von Kunst  
 und Kultur" 1892
- MONTAILLÉ  
 "Le Costume Féminin; Depuis l'époque Gauloise jusqu'à nos jours" 1894  
 "History of Feminine Costume" 1896
- LAMÉSANGÈRE, Pierre  
 "Costumes des Femmes Françaises du XIIe au XVIIIe siècle" 1900
- SÉBILLOT, Paul  
 "L'Évolution du Costume" 1908
- SCHEFER, Gaston  
 "Documents pour L'Histoire du Costume de Louis XV à Louis XVIII" 1911
- Giafferri, Paul Louis de  
 "L'Histoire du Costume Féminin Français" 1922-1923
- SAGES, Elizabeth  
 "A Study of Costume: From the Days of the Egyptians to Modern Times" 1926
- CHALMERS, Helena  
 "Clothes on and off the Stage; A History of Dress From the Earliest Times to the Present  
 Day" 1928
- PARDUCCI, Amos  
 "Costumi Ornati; Studi sugli insegnamenti di cortigiana medievali" 1928
- KELLY, Mary E.  
 "On English Costume" 1932
- COOKSON, Nesfield  
 "The Costume Book" 1934
- BARTON, Lucy  
 "Historic Costume for the Stage" 1935
- TRUMAN, Nevil  
 "Historic Costuming" 1966 (1936)
- LABOVITCH, Mark  
 "Clothes Through The Ages" 1944
- Walkup, Fairfax Proudfit  
 "Dressing the Part; A History of Costume for the theatre" 1950
- BRADLEY, Carolyn G.  
 "Western World Costume; An Outline History" 1954
- DOBSON, Dina P.

- 
- “Clothing and Costume” 1954  
ALLEN, Agnes  
“The Story of Clothes” 1967 (1955)  
TILKE, Max, etc.  
“Encyclopédie du Costume” 1955  
WILCOX, R. Turner  
“The Mode in Costume” 1958  
BRADFIELD, Nancy  
“Historical Costumes of England; from the eleventh to the twentieth century” 1958  
BARFOOT, Audrey I.  
“Discovering Costume” 1959  
GARLAND, Madge  
“Éternelle et changeante Beauté” 1960  
BENTIVEGNA, Ferruccia Cappi  
“Abbigliamento e Costume nella Pittura Italiana” 1962  
OLIVER, Jane  
“Costume through the Centuries” 1963  
CUNNINGTON, Phillis  
“Costume in Pictures” 1964  
FABRE, Maurice  
“Histoire de la Mode” 1965  
HILL, Margot Hamilton, etc.  
“The Evolution of Fashion; Pattern and Cut from 1066 to 1930” 1973 (1967)  
STIBBERT, Frederic  
“Civil and Military Clothing in Europe; from the first to the eighteenth century” 1968  
GARLAND, Madge  
“The Changing Form of Fashion” 1970  
GILBERT, John  
“National costume of the world” 1972  
SCHOFIELD, Angela  
“Clothes in History” 1974  
CLINCH, George  
“English Costume; From Prehistoric Times to the end of the 18th Century” 1975  
JANITCH, Valerie  
“Fun with Historical Costume” 1975  
HANSEN, Henny Herald  
“Kleidung der Völker in Farben” 1977 (1976)  
SICHEL, Marion  
“Roman Britain and the Middle Ages” 1977  
CUMMING, Valerie  
Exploring Costume History 1500-1900” 1981
- 

広義の pass-time book であるこれらの著述は、それ自体は研究的態度によって書かれたものとはいえないが、私の分析の対象としては価値をもつものがすくなくない。教科書の図書、あるいは専門家が若い人むきの入門書として書いたような本も、仮りにここに含めた。また西欧においては、歴史的にも重要な存在理由をもってきた、stage costume, fancy costume 等の how-to-book もここに含めた。とくに舞台衣裳

の手引書は、歴史的衣服の構造についての、具体的で現場的な苦勞の積み重ねを背後にもち、教えられるところが多いものである。

これらの著作が、一般にその云うところの根拠を欠いているのは、(むしろその種の著作をこのカテゴリーに含めたのであるから)当然ではあるが、同時に、変化についても無関心であるのがふつうである。

私が、分析の対象として価値をもつものが少くない、と言ったのは、上記のような意味で、その言わんとする内容の信憑性は高くなくても、その通俗性のゆえに、一般のひとびとの通念、ないし常識に依存しての敘述が、随所にみられるためである。たとえば、イギリスの庶民の一部にあるフランス人嫌いが、悪いファッションはみなフランスからくる、フランス人がファッション好きなのは、フランス女の体つきの醜いせいだ、というような言葉を吐かせる [FOLEY 1893: 459]。そしてさらにつづけて、そのあまり根拠のなさそうな、フランス女のからだつきの不恰好さを具体的にえがきだすのだが、このような文章は、おそらく歴史書などにはありえないだろう。

このカテゴリーに属する著述の内容は、傍証以上の根拠としては、一般には用いられない。結局、われわれに思いがけない視点などで、眼をみひらかせてくれる恩恵のないものは、採らなかつた。したがって、このカテゴリーに関しては、取捨はきわめて選択的である。

## 2. 考古学・文献学的研究

表10 考古学・文献学的研究

---

POLGE, H.	"L'iconographie des Attitudes à la cathédrale Sainte-Marie d'Anch; étude de statesthésie rétrospective" 1871
DEMAI, G.	"Le costume au moyen âge d'après les sceaux" 1880
GAY, Victor	"Glossaire Archéologique du Moyen Age et de la Renaissance" 1887
SMITH, William etc.	"A Dictionary of Greek and Roman Antiquities" 1890
DRUITT, Herbert	"A manual of costume as illustrated by monumental brass" 1906
MACKLIN, Herbert W.	"The Brasses of England" 1913 (1907)
PYRON, Camille	"Le Costume civil en France du XIIIe au XIXe siècle" 1913
ENLART, Camille	"Manuel d'archéologie française depuis les temps merovingiens jusqu'à la Renaissance" 1916

---



- 
- LELOIR, Maurice  
“A Mediaeval Doublet” 1936
- BROHOLM, H. C. etc.  
“Costumes of the Bronze Age in Denmark” 1940
- LAVER, James  
“Mode du moyen-âge et de la renaissance d’après des frottis des tombes de cuivre” 1947
- BROHOLM, H. C. etc.  
“Bronze Age Fashion” 1948
- BRÖNDSTED, Johannes  
“Bronze Age Clothing Preserved in Danish Graves” 1950
- LUNDQUIST, Eva Rodhe  
“La Mode et son Vocabulaire: quelques termes de la mode feminine au moyen âge suivis dans leur évolution sémantique” 1950
- PASQUINO, Marie-Louise  
“Un costume finnois du XIIe siècle” 1962
- SHEE, Elizabeth A. etc.  
“A Clothed Burial from Emlagh, near Dingle, Co. Kerry” 1966
- THIERRY, Nicole  
“Le costume épiscopal byzantin du IXe au XIIIe siècle d’après les peintures datées (miniatures, fresques)” 1966
- HUNT, John M. A.  
“Irish Medieval Figure Sculpture 1200-1600; A study of Irish tombs with notes on costume and amour” 1974
- 

上にあげた2分野のほかに、美学・美術史学を加えれば、これらは服装研究のための伝統的な補助学であった。ヨーロッパでの、考古学的遺品による服装研究で、ひとつの時代を劃したのは、Demay による sceaux, Druitt による monumental brass の、精密な年代記的考証だったとおもう。この系列の研究は、当然ながら、頑なに即物的であることにより、実証的であろうとつとめ、その一般化の議論については冷淡であることが多い。ものの事実のもつ重みが圧倒的であるために、その見解はまことに権威的であるが、仮説や推論にたいしては不寛容な態度が多いものである。私がとりあげた文献は、服装に直接関係する図書としては、大きな見落としはないはずであるが、雑誌論文については、ほとんどすべてのものを捨てた。その理由は、それらが概して、事実の計測的報告以上のものでなく、私の目的には役立たないためである。

古典学・古文献学的研究としてもっとも重要なものに、19世紀末になされた、W. Smith, V. Gay の労作があるが、さらにこれに Oxford English Dictionary を加えるべきかもしれない。一般に言語学的研究は、その分野の専門家の広範囲な渉獵の網の一部に、たまたま服装関連の語彙あるいは用例が拾われるので、服装専門家以外の人、カジュアルな研究成果であることがふつうである。しかしそうでなく、たとえば “bibliophile Jacob” とみずから称する Lacroix, あるいは Planché のような、浩瀚

な量の根本文献を駆使する力をもつ服装研究者でも、こうした文献的専門家は、ともすれば、ものとしての衣服の実際的知識と感受性を欠き、いかえれば結局、服装がわからない人が多いものである。したがって羅列的事実としては貴重な **Handbuch** を提供しえても、その意見には、これとしてみるべきものがない場合が多い。

### 3. 歴史学的研究

表11 歴 史 学 的 研 究

---

VIEL-Castel, H. de	“Collection des costumes, armes et meubles, pour servir à l’histoire de France” 1827
STRUTT, Joseph etc.	“The Regal and Ecclesiastical Antiquities of England” 1842
SHAW, Henry., F. S. A.	“Dress and Decorations of the Middle Ages; from the Seventh to the Seventeenth Century” 1843
BEVEREN, (V.) etc.	“Costumes du Moyen Age; d’après les manuscrits, les peintures et les monuments contemporains” 1847
LACROIX, Paul (Le Bibliophile Jacob)	“Costume Historiques de la France” 1852
VIOLET-le-Duc	“Dictionnaire Raisonné du Mobilier Français” 1858
BONNARD, Camille	“Costumes historiques des XIIe, XIIIe, XIVe et XVe siècle” 1860
KERCKHOFF, E.	“Le costume à la cour et à la ville; Étiquette tenue officielle et de fantaisie” 1865
LACROIX, Paul	“Mœurs, usages et costumes au moyen âge et à l’époque de la Renaissance” 1873
BLANC, Charles	“L’art dans la parure et dans le vêtement” 1875
QUICHERAT, J.	“Histoire du costume en France depuis les temps les plus reculés jusqu’à la fin du XVIIIe siècle” 1875
PLANCHÉ, James R.	“A Cyclopaedia of Costume or Dictionary of Dress” Vol. 1. The Dictionary 1876
PLANCHÉ, James	“A Cyclopaedia of Costume or Dictionary of Dress” Vol. 2. General History of Costume in Europe 1879
CHALLAMEL, Augustin	“Histoire de la Mode en France; La toilette des femmes depuis l’époque Gallo-Romaine jusqu’à nos jours” 1881
KLEMM, Heinrich	“Geschichte der...Dresdener Schneider-Innung von ihren ersten Spuren bis auf die Neuzeit; Eine Denkschrift, etc.” 1881
WEISS, Hermann	“Kostümkunde: Geschichte der Tracht und des Geräths der Völker des Alterthums” 1881
FALKE, Jacob von	“Kostümgeschichte der Kulturvolker” 1881

---

- 
- KRETSCHMER, Albert etc.  
“Die Trachten der Völker vom Beginn der Geschichte bis zum neunzehnten Jahrhundert”  
1882
- SCHILD, Marie  
“Old English Costumes” 1883
- FAIRHOLT, F. W. etc.  
“Costume in England; A History of Dress to the End of the Eighteenth Century” 1885
- GILES, Edward B.  
“The History of the Art of Cutting in England; preceded by a sketch of the History of English Costumes” 1887
- RENAN, Ary  
“Le Costume en France” 1890
- SMITH, William etc.  
“A Dictionary of Greek and Roman Antiquities” 1890
- HILL, Georgiana  
“A History of English dress from the Saxon period to the present day” 1893
- MACALISTER, R. A. S.  
“Ecclesiastical vestments” 1896
- QUINCKE, Wolfgang  
“Handbuch der Kostümkunde” 1896
- GARDINER, Florence Mary  
“The Evolution of Fashion” 1897
- PLANCHÉ, J. R.  
“History of British costume from the earliest period to the close of the eighteenth century”  
1907
- PRELLE de la Nieppe, Edgar  
“Note sur les Costumes Chevaleresques et les Armes Offensives des XIIe, XIIIe, et XIVe siècle” 1901
- RUMPF, Fritz  
“Der Mensch und seine Tracht” 1905
- CALTHROP, Dion Clayton  
“English Costume” 1906
- D'ANCONA, Paolo  
“Le Vesti delle Donne Florentine; nel secolo XIV” 1906
- CLINCH, George  
“English Costume: from prehistoric times to the end of the eighteenth century” 1909
- LÅNGFORS, Artur  
“Deux témoignages inédits sur le costume des élégants au XIVe siècle” 1913
- ENLART, Camille  
“Manuel d'Archéologie française depuis les temps mérovingiens jusqu'à la Renaissance”  
1916
- HEUZEY, Leon  
“Histoire du Costume antique; d'après des études sur le modèle vivant” 1922
- GRAY, H. L.  
“The Production and Exportation of English Woolens in the Fourteenth Century” 1924
- KENDRICK, A. F.  
“Catalogue of Early Medieval Woven Fabrics” 1925
- LESTER, K. M.  
“Historic Costume: A résumé of the Characteristic Types of Costume from the Most Remote Times to the Present Day” 1942 (1925)
-

- 
- SAGES, Elizabeth  
 "A Study of Costume; from the Days of the Egyptians to Modern Times" 1926
- NORRIS, Herbert  
 "Costume and Fashion" 1927
- BOURRILLY, Joseph  
 "Le Costume en Provence au Moyen Age" 1928
- KÖHLER, Carl  
 "A History of Costume" 1928
- MILLER, Sylvia A.  
 "Old English Laws Regulative Dress" 1928
- HARMAND, Adrien  
 "Jeanne d'Arc: Ses Costumes, Son Armure—Essai de Reconstitution" 1929
- EVANS, Mary  
 "Costume Throughout the Ages" 1950 (1930)
- GRANCSAY, Stephen V.  
 "The Mutual Influence of Costume and Armour: A Study of Specimens in the Metropolitan Museum of Art" 1931
- HARTLEY, Dorothy  
 "Mediaeval Costume and Life" 1931
- BOEHN, Max  
 "Modes and Manners" 1932
- BARTON, Lucy  
 "Historic Costume for the Stage" 1935
- BROOKE, Iris  
 "English Costume of the Early Middle Ages: The Tenth to the Thirteenth Centuries" 1977 (1936)
- BROOKE, Iris  
 "English Costume of the Later Middle Ages: The Fourteenth and Fifteenth Centuries" 1977 (1936)
- BALDWIN, Muriel  
 "Costume 1400—1600: An Exhibition in the Spencer Room" 1937
- WILSON, Lillian M.  
 "The Clothing of the Ancient Romans" 1938
- HÖLLRIGL, J.  
 "Historic Hungarian Costume" 1939
- EVANS, R. K.  
 "Dress; The evolution of cut and its effect on modern design" 1939
- HOUSTON, Mary G.  
 "A Technical History of Costume; Medieval Costume in England & France" 1939
- CUNNINGTON, C. Willet  
 "Why Women Wear Clothes" 1941
- TOUDOUZE, Georges Gustave  
 "Le Costume français" 1945
- DAVENPORT, Millia  
 "The Book of Costume" 1962 (1948)
- CUNNINGTON, C. Willett  
 "The Art of English Costume" 1948
- NORRIS, Herbert  
 "Church Vestments; Their Origin and Development" 1949
- LELOIR, Maurice  
 "Histoire du costume de l'antiquité à 1914" 1934-1949
-

- EVANS, Mary  
“Costume throughout the Ages” 1950 (1930)
- LUNDQUIST, Eva Rodhe  
“La Mode et son Vocabulaire; quelques termes de la mode feminine au moyen âge suivis dans leur évolution sémantique” 1950
- POERCK, G. de  
“La draperie médiévale en Flandre et en Artois: technique et terminologie” 1951
- VOCINO, Michele  
“Storia del Costume; Venti Secoli di Vita Italiana” 1952
- YARWOOD, Doreen  
“English Costume; from the Second Century B.C. to 1960” 1961 (1952)
- Evans, Joan  
“Dress in Mediaeval France” 1952
- GORSLINE, Douglas  
“A History of Fashion: A Visual Survey of Costume from Ancient Times to the Present Day” 1953
- HANSEN, Henny Herald  
“Costume Cavalcade” 1972 (1954)
- ŠROŇKOVÁ, Olga  
“Gothic Woman’s Fashion” 1954
- Aubert, Marcel  
“Michèle Beaulieu et Jeanne Bayle, Le costume en Bourgogne de Philippe le Hardi à la mort de Charles le Téméraire (1364–1477) 1957 (book review)
- BUCK, Anne M.  
“Lecture on ‘Wool in the History of Fashion’” 1957
- BINDER, Pearl  
“The Peacock’s Tail” 1958
- DROBNA, Zoroslava etc. (text), EDWARD Wagner (illustrated)  
“Medieval Costume, Armour and Weapons; 1350–1450” 1958
- ŠROŇKOVÁ, Olga  
“Fashion through the Centuries; Renaissance, Baroque and Rococo” 1959
- THIENEN, F. van  
“Huit Siècles de Costume; L’Histoire de la Mode en Occident” [Original title “Acht eeuwen westeuropes costuum”] 1961
- BEAULIEU, Michèle  
“Le costume antique et médiéval” 1961
- BARFOOT, Audrey  
“Everyday Costume in Britain: Form the Earliest Times to 1900” 1961
- EISENBART, Liselotte Constanze  
“Kleiderordnungen der deutschen Städte zwischen 1350 und 1700” 1962
- LAVER, James  
“Costume” 1963
- NEVINSON, J. L.  
“Storia del Costume in Italia by Rosita Levi-Pisetzky” 1965 (book review)
- PISETZKY, Rosita Levi  
“Storia del Costume in Italia” 1964
- BOUCHER, François  
“Histoire du Costume; En Occident de l’Antiquité à nos jours” 1965
- PAYNE, Blanche  
“History of Costume; From the Ancient Egyptians to the Twentieth Century” 1965
-

- 
- CONTINI, Mila  
 "Fashion: From Ancient Egypt to the Present Day" 1965
- CLARKE, Joan  
 English Costume through the Ages" 1966
- GREEN, Ruth  
 "The Wearing of Costume: The Changing Techniques of Wearing Clothes and How to Move in them—From Roman Britain to the Second World War" 1966
- GATTY, Charles Neilson  
 "The Bloomer Girls" 1967
- LISTER, Margot  
 "Costume: An Illustrated Survey from Ancient Times to the Twentieth Century" 1967
- ENDREI, Walter  
 "L'évolution des Techniques du filage et du tissage; du Moyen Age à la révolution industrielle" 1968
- STANILAND, Kay  
 "The Medieval Corset" 1969
- MELLENCAMP, Emma H.  
 "A Note on the Costume of Titian's Flora" 1969
- LAVER, James  
 "A Concise History of Costume" 1969
- STAVRIDIS, Margaret, etc.  
 "The Hugh Evelyn History of Costume" 1966-1970
- PISTOLESE, Rosana, etc.  
 "History of Fashions" 1970
- AGRON, Suzanne  
 "Précis d'histoire du costume" 1970
- OAKES, Alma etc.  
 "Rural Costume; Its Origin and Development in Western Europe and the British Isles" 1970
- PIPONNIER, Françoise  
 "Costume et vie sociale; la cour d'Anjou 14th-15th siècle" 1970
- BELL, Clifford R. etc.  
 "Sumptuary Legislation and English Costume: An Attempt to Assess the Effect of an Act of 1337" 1972
- LISTER, Margot  
 "Costumes of Everyday Life; An Illustrated History of Working Clothes from 900 to 1900" 1972
- NORMAN, A. V. B.  
 "A Short History of Costume and Armour 1066-1800 by Francis M. Kelly and Randolph Schwabe, 1972" 1973 (book review)
- SMITH, Roger  
 "Bonnard's Costume Historique: A pre-Raphaelite Source Book" 1973
- NEWTON, Stella Mary  
 "Health, Art & Reason; Dress Reformers of the 19th century" 1974
- BIRBARI, Elizabeth  
 "Dress in Italian Painting 1460-1500" 1975
- WEE, Herman van der  
 "Structural Changes and Specialization in the Industry of the Southern Netherlands, 1100-1600" 1975
- BYRDE, Penelope  
 "The Male Image; Men's Fashion in England 1300-1970" 1979 (1976)
-

- 
- NEWTON, Stella Mary  
“The Literature of Dress” 1976
- KEMPER, Rachel H.  
“Costume” 1977
- SICHEL, Marion  
“Roman Britain and the Middle Ages” 1977
- STANILAND, Kay  
“Clothing and Textiles at the Court of Edward III, 1342-1352” 1978
- KNAUER, Elfriede R.  
“Towards A History of the Sleeved Coat: A Study of the Impact of an Ancient Eastern Garment on the West” 1978
- EWING, Elizabeth  
“Dress and Undress; A history of women’s underwear” 1981 (1978)
- BYRDE, Penelope  
“The Male Image; Men’s Fashion in England 1300-1970” 1976
- NEWTON, Stella Mary  
“Fashion in the Age of the Black Prince” 1980
- SCOTT, Margaret  
“Late Gothic Europe, 1400-1500; The History of Dress Series” 1980
- GERVERS, Veronika  
“The Influence of Ottoman Turkish Textile and Costume in Eastern Europe” 1982
- 

史学的研究は絶対数も多いうえ、その対象、観点もさまざまである。ある国の全般的服装史としては、各国にはそれぞれ、記念碑的な大作—比較的近い時代でも、イタリアの Pisetzky, ドイツの Boehn, フランスの Leloir (未完), イギリスの Norris (未完), Cunnington—があり、網羅的敘述によってこれらを凌ぐことは困難、という理由もあってか、一般に西欧の史学書には、特色ある視点をもつものが多い。文献史家が比較的冷淡ともいえた、衣服の構造についても、すでに19世紀には Weiss が強い関心を示している。その関心を展開させ、設計展開図を呈示してその敘述をしたのは Köhler ではあったが、その典拠は一切示していない。西欧の構造論は、まえに触れた舞台衣裳用にも役立てようとの配慮からか、結果だけを重んじた大膽な推論が目につく。

構造についての議論を、文化比較の立場から発展させたのは、ドイツ、北欧の研究者で、その歴史は比較的あたらしい。ただし、比較という立場に立ったとき、個々の文化の内側での史的展開の分析が不十分で、やや平面比較的傾向に陥りがちである。

イギリス、フランスの服装史書のひとつの特色として、人物中心の物語的敘述があり、とくに第二次大戦前にその傾向がめだつ。たとえば Leloir や, Norris の大著においても、敘述のそうした特色が、これらの著書に幾分かの通俗味を添えるのである。

われわれは英、仏の服装史書のこのような特色に、舞台衣裳の典拠として行われてきた、服装史研究のなごりを感じとる。歴史上の人物に、彼の生きた時代の正確な衣

裳を着せる，ということが，舞台衣装のひとつの目的であった。ただし舞台衣裳の場合は，正確さは演出のひとつの要素にすぎない。服装史書においては，ある人物の生活の，微視的なまでの実像の再現によって，人間理解のひとつの手段としているのではないかとさえ，印象づけられる。

英，仏の服装史書には，シャルルマーニュや聖ルイが，しばしばひとりの“actor”として登場する。わが国の服装史研究で好まれるテーマは，「紫式部日記における服装」であるが，これを英，仏流にとりあげれば，「紫式部の着た服装」の研究になる。その意味で，近代西欧における，もっとも典型的な成果は，Harmand, A. <Jeanne d'Arc: Ses Costumes, son Armure> (1929) であろう。

また，このような研究態度は，別項でのべる，人性論的服装論への，流れのみちをひらくもの，ともいえる。

服装史の本来の領域ではないが，その敘述の間にかいま見える主題のひとつは，服装の歴史における，進歩の問題である。西欧の服装史が，こうしたいわば歴史哲学的領域にあしをふみこむのは，ファッションがいつ始まったか，ファッションとはなにか，そしてその評価の問題を，避けて通ることがむづかしいためである。

以上のべたような理由からも，このカテゴリーは，1. と区別がつきにくいものも多いが，ほぼ網羅的に分析の対象とした。

#### 4. 総合的批判

表12 総合的批判

---

ALISON, Archibald	
"Essays on the Nature and Principles of Taste"	1790
SCHIMMELPENNINGK, Mary Anne	
"Theory on the Classification of Beauty and Deformity, and their Correspondence with Physiognomonic Expression"	1815
CARLYLE, Thomas	
"Sartor Resartus; the life and opinions of Herr Teufelsdröckh"	1836
A Lady of Rank	
"The Book of Costume; or, Annals of Fashion, from the Earliest Period to the Present Time"	1846
HOOPER, Lucy H.	
"Fig Leaves and French Dress"	1874
BLANC, Charles	
"L'art dans la parure et dans le vêtement"	1875
OLIPHANT	
"Dress"	1878
WAKE, C. Staniland	
"The Evolution of Morality; being A History of the Development of Moral Culture"	1878

---



- 
- HAWEIS, H. R.  
"The Art of Dress" 1879
- The Lounger in Society  
"The Glass of Fashion: A Universal Handbook of Social Etiquette and Home Culture for Ladies and Gentlemen" 1881
- HOLDING, T. H.  
"Comfort & Economy in Clothes" 1881
- STEELE, Frances Mary, etc.  
"Beauty of Form and Grace of Vesture" 1892
- GARDINER, Florence Mary  
"The Evolution of Fashion" 1897
- GRATEROLLE, Maurice  
"Du costume et de la toilette dans l'antiquité et de nos jours" 1897
- UZANNE, Octave  
"L'Art et les Artifices de la Beauté" 1902
- ARMOND, Silvestre  
"préface pour «Le Pantalon féminin»" 1906
- DUFAY, Pierre  
"Le Pantalon féminin" 1906
- RHEAD, G. Woolliscroft  
"Chats on Costume" 1906
- Fontenouille G. de  
"Le Faux-Luxe' et l'abandon des costumes locaux dans les campagnes" 1913
- MARAI, M. Paul  
"Trois causeries sur l'histoire du costume faite aux Soirées paroissiales de Saint-Germain-l'Auxerrois" 1914
- DEBLAY, A.  
"Histoire anecdotique du costume en France, de la conquête romaine à nos jours" 1924
- HEARD, Gerald  
"Narcissus; An Anatomy of Clothes" 1924
- CURTIS, G. F.  
"Clothes and the Man" 1926
- ROULIN, Dom E.  
"Linge, insignes et vêtements liturgiques" 1930
- GILL, Arthur Eric R.  
"Clothes; An Essay upon the Nature and Significance of the Natural and Artificial Integuments worn by Men and Women" 1931
- ALLEN, F. L.  
"Only Yesterday" 1931
- BRUMMEL, G. B.  
"Male and Female Costume" 1932
- PRICE  
"When Men Wore Muffs" 1936
- SETTLE Alison  
"Clothes Line" 1937
- YOUNG, Agnes Brooks  
"Recurring Cycle of Fashion 1760-1937" 1937
- MARINUS, Albert  
"Fantaisie sur la Parure" 1941
-

- 
- CUNNINGTON, C. Willett  
 “The Art of English Costume” 1948
- CUNNINGTON, C. W.  
 “The Perfect Lady” 1948
- LANGLEY-MOORE, Doris  
 “The Women in Fashion” 1949
- LAVER, James  
 “Style in Costume” 1949
- CUNNINGTON, C. Willett  
 “Women” 1950
- BINDER, Pearl  
 “Muffs and Morals” 1953  
 “The Peacock’s Tail” 1958
- TABORI, Paul  
 “The Art of Folly” 1961
- ADBURGHAM, Alison  
 “View of Fashion” 1966
- BROBY-JOHANSEN, R.  
 “Body and Clothes; An Illustrated History of Costume” [original title “Krop og Kloer”]  
 1968(1966)
- CLAUDE-SALVY,  
 “Le monde et la mode” 1966
- YOXALL, H. W.  
 “A Fashion of Life” 1966
- GATTY, Charles Neilson  
 “The Bloomer Girls” 1967
- LOUYS, Madeleine  
 “Le costume; pourquoi et comment” 1967
- D’ASSAILLY, Gisèle  
 “Les Quinze Révolutions de la Mode” 1968
- LAVER, James  
 “Modesty in Dress; An Inquiry into the Fundamentals of Fashion” 1969
- GROVE, Jane  
 “Fashion” 1971
- DORNER, Jane  
 “Fashion; The Changing Shape of Fashion Through the Years” 1974
- NEWTON, Stella Mary  
 “Health, Art & Reason: Dress Reformers of the 19th century” 1974
- ORDISH, Olive  
 “Dress and Fashion” 1974
- BLACK, J. Anderson, MADGE Garland, etc.  
 “A History of Fashion” 1983 (1975)
- DOES, Eline Canter Cremers-van der  
 “The Agony of Fashion” 1980 (1975)
- SUTTON, Joan  
 “Clothing and Culture; Contemporary Concepts” 1979 (1975)
- BUCK, Anne M.  
 “Dress as a Social Record” 1976
- YORK, Peter  
 “Style Wars” 1980
-

- 
- BATTERBERRY, Michael, etc.  
“Fashion: the mirror of history” 1982  
LAVER, James  
“The Future of Fashion” n.d.
- 

このカテゴリー名は適当ではない。書誌的には、英国図書館件名 costume 項中、私のカテゴリー1, 2 および4~9 に区分しえない著作を、原則としてここに置く。内容の点からいえば、costume 書の中で、いわゆる *etiquette book*, *moral book* に接する系統のものになる。

わが国の女大学、庭訓書といわれるものは、一方の端には、交際や趣味、料理、育児といった、いわゆる *how-to-book* 的内容と、他の端には、人の道の論しといった、道徳訓的内容をもつが、全体としていえば日常生活の実用的目的を意図したものであり、この類の著作は、カテゴリー8. においた。

それにたいして、とくにこの項を設けた理由は、西欧の *moral book* の系統の中には、単なる教訓書ということではなく、むしろ“*moeurs*”について議論する、という態度によって、特色のあるものが多いためである。

19世紀の服装論には、人の装いもまた霊の問題、といった観点から論じられたものが少くない。Pendleton は、“*Esthesiology*”ということばを用いて (*esthesis*=*clothing*)、その *logos* とは、全く神学的考察の文脈の中におかれている。Pendleton の服装論は、発表の13年後にべつべつの雑誌に再録されているので [PENDLETON 1843: 230-234; 1856: 199-211]、一定の反響はあったのであろうが、イギリスの地方図書館などには、小教区の無名の牧師の書いた、相当にエキセントリックな内容の、服装攻撃のパンフレットなどを見ることがある。

この種のものをも底辺にして、10人10色の立場で、ときには服装そのものにもとらわれることなくかかれた、ある意味での文学作品が、この系統である。

その議論のおもな標的は、服装の美的観点と、倫理的観点とであるが、衣生活の現実の“人間性”論の中では、このふたつはべつべつには考えられないものである。たとえば、服装の美的な、あるいは美学的研究といったものは、概して一種の空論にすぎないものである。19世紀的な、服装の人間性論が、観念的であったり、逆にあまりに文学的であったりするものは、概してそれらが、書齋の思索の中だけから生れた産物のせいではないだろうか。

けれども、このような教養主義的、安楽いすの人間性論ではあっても、服装を、“人間を考える”姿勢のなかでとらえようとする行き方は、わが国の近代の服装研究の中

では、手薄な領域であり、われわれにとっては、魅力ある著作が多い。

さて、前世紀のおわる頃から、この種の人間性論的服装研究は、その中にふくまれる主要な部分が、科学的な方法論をえて分化することになる。それと歩調をあわせて、ある程度通俗的な読みもの性をもった文明批評としての、この領域のあたらしい展開がはじまる。そうした意味での、その時点での記念碑的な著作は Blanc の〈L'art dans la parure et dans le vêtement〉(1875) と、Haweis の〈The Art of Dress〉(1879) であろう。Haweis 夫人は、コルセット反対を主張する改良服論者として著名だが、牧師の妻で、挿絵画家でまた小説家でもあり、〈Art of Decoration〉(1881)、〈Art of Housekeeping〉(1889) など17冊もの著書をもつ、ビクトリア朝風の読物作者であり、ものの見方の細やかさと、考えの柔軟性とで、このカテゴリーの服装書の魅力を代表するとさえいえる。

わが国でもよく知られているものには、いくぶん19世紀的晦渋さをのこす, Carlyle の〈Sartor Resartus〉(1836) や、鋭利ではあるがややペシミシックな Gill の〈Clothes〉(1831) がある。Gill におけるように、日常生活における人間省察の深さに加え、ものの見方の奇警さやウィットも、読み物としてのこの系統の著書の武器である。「ポケットとは、使用しないことが条件の附属品」[GRATEROLL 1894: 97]、  
「ファッションは、洋服屋がおなじものばかり縫うのに飽きるとつくりだすもの」[HEARD 1924: 88]。

私が、このカテゴリーを“文学的”と言ったのは、こうした警句的表現を指してのみ、いっているわけではない。たとえば, Fontenouille は、農民の伝統的服装と、都会の流行との関係の問題で, Lamartine の〈Graziella〉の中の、純朴な村娘 Graziella が、別れてゆく18才のラマルチヌに気に入られようと、“みるも無惨な”パリ風の粧いで、彼の部屋を訪れる、最後の場面を紹介する [FONTENOUILLE 1913: 7, 8]。こうした語り口は、ディスカッションではなく、読む人の心情に、問題を投げかけるのである。〈The perfect Lady〉(1948) や、〈WOMEN〉(1950) の時代の Cunnington も、その意味ではまさに、このカテゴリーにはいるべきであろう。

一般に、人間性論的服装論の著者には、衣服そのものについての、じゅうぶんな知識に欠ける人が多い。具体的知識の乏しさが、かえってその見方の、一面的でしかないがための切れ味になる、ともいえるのだが。

人間論としての服装批判は、ファッションについての関心も浅くはないのであるが、しかし一般にその関心の内容は、好意的なものではない。このカテゴリーにふくまれる著者には、衣服についての具体的知識の乏しさのひとつの原因である、自分自身の

身じまいについての消極的態度のほか、ファッションへの嫌悪のようなものが、感じとれる発言さえある。ファッションについての Oscar Wilde のよく知られた警句と似た口調の発言は、ある種の大衆的な文化への、書齋人的な偏見ともうけとれるのである。

5. 民族学的研究

表13 民族学的研究

---

BEY, Hamdy etc.	
“Les Costumes populaires de la Turquie en 1873”	1873
FLOWER, William Henry	
“Fashion in Deformity”	1881
PREVOST, Gabriel	
“Le Nu, Le Vêtement, La Parure: chez l’Homme et chez la Femme”	1884
COCHERIS, P. W.	
“Les Parures primitives avec une introduction sur les temps préhistoriques”	1894
DIOSY, Arthur	
“The New Far East”	1898
BROWNELL, Clarence Ludlow	
“The Heart of Japan: Glimpses of Life and Nature far from the Travellers’ Track in the Land of the Rising Sun”	1904
RITTNER, Geo. H.	
“Impressions of Japan”	1904
BOYLE, Frederick	
“Savages and Clothes”	1905
KNOX, George William	
“Japanese Life in Town and Country”	1905
WEBB, Wilfred Mark	
“The Heritage of Dress: Being Notes on the History and Evolution of Clothes”	1907
REICHARDT, Annie	
“Girl-Life in the Harem: A True Account of Girl-Life in Oriental Climes”	1908
SÉBILLOT, Paul	
“L’Évolution du Costume”	1908
CHAUVELOT, Robert	
“Le Japon souriant: Ses Samourais, Ses Bonzes, Ses Geishas”	1923
TILKE, Max	
“Studien zu der Entwicklungsgeschichte des Orientalischen Kostüms”	1923
TE RANGI HIROA (P. H. BUCK)	
“The Evolution of Maori Clothing”	1926
GIAFFERRI, Paul Louis de	
“The History of the Feminine Costume of the World”	1927
CRAWLEY, Ernest	
“Dress, Drinks, and Drums: Further studies of savages and sex”	1931
LAJTHA, Edgar	
“The March of Japan”	1936
GARIS, Frederic de	
“Their Japan; Being brief descriptions of noteworthy phases of Japanese life, of many of the customs, festivals, arts and crafts of the Japanese—”	1937

---

- 
- ROEDIGER, Virginia More  
 “Ceremonial Costumes of the Pueblo Indians” 1941
- MARINUS, Albert  
 “Fantaisie sur la Parure” 1941
- YOUNG, James R.  
 “Behind the Rising Sun” 1942
- HANSEN, Henny Herald  
 “Mongol Costume” 1950
- NIENHOLDT, Eva  
 “Kostümkunde” 1961
- WILCOX, R. Turner  
 “Folk and Festival Costume of the World” 1965
- TELFORD, A. A.  
 “Yesterday’s Dress: A History of Costume in South Africa” 1972
- GILBERT, John  
 “National Costume of the World” 1972
- BURNHAM, Dorothy K.  
 “Cut my Cote” 1973
- GERVERS, Veronika  
 “The Historical Components of Regional Costume in South-Eastern Europe” 1975
- HAMARE, Ida, etc.  
 “Making Simple Clothes” 1980 (1978)
- AMSELLE, Jean-Loup (ed.)  
 “Le Sauvage à la Mode” 1979
- Musée National d’Histoire Naturelle  
 “Splendeur des Costumes du Monde: Exposition présentée au Musée de l’Homme” 1979
- SNOWDEN, James  
 “The Folk Dress of Europe” 1979
- 

旅行記、見聞ノートのたぐいを、素朴民族誌とみれば、このカテゴリーにふくまれる著作は、他のどんなカテゴリーよりも古いかもしれない。しかし私の対象とする約150年のあいだに、学問としての態度、方法のうえでもっとも動揺のあったもの、このカテゴリーではないだろうか。19世紀の服装民族誌の中に、“低級民族”といったいいかたがはっきりでてくるし、人種の優劣論などは、もっとも人気のあるテーマだった。Flower, Cocheris の著書における、身体変形やお歯黒の敘述の態度の中には、遠い国から、アルコール漬けの怪物を仕込んできた興行師のような口吻が、ないとはいえないのである。

通俗民族誌のもうひとつのねらいは、その時代に好まれたいいかたを借りるなら、異国の“picturesque”な旅情をたのしむ、ということであった。Ferrario, Wahlen, Hottenroth, Rachinet の大著、また最近復刻された〈Zur Geschichte der Kostüme〉(1891) など、その多くは精密な銅版画で線刻された、ものめずらしい服装・風俗を辿っての世界旅行、というねらいが感ぜられる。そのねらいは、オランダのK. & T.

Willink 社によって1865年から1936年にかけて刊行された。この分野の記念碑的シリーズ〈De Aarde en haar Volken〉と、重なるものがある。

ところで、民族誌的服装書のひとつの功績は、その学問的態度がある程度どうあれ、すくなくとも服装研究の各分野に、新鮮で示唆に富む、豊富な事例を提供した点であろう。とりわけ前世紀の末から今世紀のはじめにかけて、おなじように新興の学問であった心理学への寄与は、大きかったと考えられる。

一般的に言えば、民族誌的事例は、西欧人のそれまでの常識にも信念にも、wet blanket の役割を果した場合がすくなくない。服装研究の領域もまた、異文化に対する単純な好奇心や侮蔑の一段階がすぎると、いわば相対主義の段階にはいったといえよう。しかしすくなくとも、美的な価値基準に関しての相対主義は、今日においてもなお、十分に説得力のある議論がなされているとはいえない。

大著時代以後の民族服装論は、構造比較による、衣服の系統樹論を重要な柱として、Tilke に代表されるドイツと、北ヨーロッパ諸国、あるいは東欧諸国に、研究の中心がうつったとおもえる。とくにデンマークの青銅期遺跡の調査、中でも1920年のEgtved の発掘が、北ヨーロッパの研究者の研究意欲に、はずみをつけた、とも感ぜられる。中・西部ヨーロッパの服装研究が、スタイリングへの、観賞的アプローチに偏する傾向があり、そこにある種の“甘さ”がありえたのにたいして、物理・工学的分析を前提としての、実証的方法は、服装研究全体の評価をたかめたともいってよい。

しかも、そのデンマークを代表する研究者のひとり、Hansen であって、かの女の、一面できわめて感傷的な、そして〈Daughters of Allah〉(1960) また〈Investigations in Shi'a Village in Bahrain〉(1967) におけるような、民族誌的“回帰”を思わせる仕事をみると、西欧における、人間性論的服装研究の根の深さを感じるのである。

なお、服装の民族学的研究は、全体的な民族誌の一部として上梓されることが多く、今回のような検索の方法からは、たくさんのすぐれた著作が洩れたであろうことは、残念である。

## 6. 社会・経済学的、心理学的研究

表14 社会・経済学的、心理学的研究

---

PENDLETON, W. N.
“The Philosophy of Dress” 1843
GODKIN, E. L.
“The Rationale of the Fashion” 1867

---

- 
- PARTON, J.  
 "Clothes Mania" 1869
- SPENCER, H.  
 "The Principles of Sociology" 1892
- FOLEY, C. A.  
 "Fashion" 1893
- LOTZE, Hermann  
 "Microcosmus: An Essay Concerning Man and his Relation to the World" 1899
- SIMMEL, G.  
 "Philosophische Kultur" 1919 (1904)
- RUMPH, Fritz  
 "Der Mensch und seine Tracht" 1905
- FLACCUS, Louis W.  
 "Remarks on the Psychology of Clothes" 1906
- GOMEZ-Carrillo, E.  
 "Psychologie de la Mode" 1910
- CRAWLEY, E.  
 "Encyclopedia of Religion and Ethics—Dress" 1912
- BLISS, Sylvia H.  
 "The significance of Clothes" 1916
- MÉRY, Albert  
 "Le Vêtement et ses Accessoires" 1918
- DEARBORN, George van Ness  
 "The Psychology of Clothing" 1918?
- PARSONS, Frank Alvah  
 "The Psychology of Dress" 1923
- HURLOCK, Elizabeth B.  
 "The Psychology of Dress: An analysis of fashion and its motive" 1923
- FLÜGEL, J. C.  
 "The Psychology of Clothes" 1930
- GILL, Arthur Eric R.  
 "Clothes" 1931
- KROEBER, A. L., etc.  
 "Three Centuries of Women's Dress Fashions: A Quantitative Analysis" 1940
- BERGLER, Edmund  
 "Fashion and the Unconciuous" 1953
- KÖNIG, René etc.  
 "Die Mode: in der menschlichen Gesellschaft" 1961 (1958)
- ROACH, Mary Ellen, etc.  
 "Dress, Adornment, and the Social order" 1965
- RYAN, Mary Shaw  
 "Clothing: A Study in Human Behavior" 1966
- BRINGEMEIER, Martha  
 "Wandel der Mode im Zeitalter der Aufklärung; Kulturgeschichtliche Probleme der Kostümkunde" 1966
- BARTHES, Roland  
 "Système de la Mode" 1967
- FAIRLEY, Roma  
 "A Bomb in the Collection: Fashion with the Lid off" 1969
- NEWTON, Stella Mary  
 "Concise History of Costume" by James Laver 1970 (book review)
-



- 
- MARAÑON, Gregorio  
“Psychologie du geste, du vêtement et de la parure” 1971
- WILMOTT, Sheila  
“Fashion and Dress” 1971
- KÖNIG, René  
“The Restless Image: A Sociology of Fashion” 1973
- SUTTON, Joan  
“Clothing and Culture; Contemporary Concepts” 1979 (1975)
- DESCAMPS, Marc-Alain  
“Psychosociologie de la mode” 1979
- 

服装書のなかでは、史学とともに、科学的方法の適用がすすんでいて、したがってその客観性のため、観点における西欧的特色といったものはとらえにくく、本稿での私の目的にとっては、興味のもてるデータには乏しかった。

民族学とおなじようにこのカテゴリーも、服装プロパーでない著作の中に、影響力をもった有力な議論があり、とりわけ心理学の分野で、そのことがいえそうである[ALISON 1790; SCHIMMELPENNINGK 1815; SPENCER 1892; HERMANN 1899; SIMMEL 1904]。前世紀の心理学は認識論の一部であったから、一般に哲学の領域内で、服装や装粧 (personal tornament) の意識に関する、あるいはこれらのことを例にひいての、議論が行われたのであった。

服装心理の学問的声価をたかめ、また逆にこの学問への反感の標的—たとえば Langley-Moore の批判 [1949: 1-3]—ともなったのは、Flügel の〈The Psychology of Clothes〉(1930) である。精神分析学の手法を服装の分析にもちいた研究は、すでにめずらしいとはいえなかったのであるが、Flügel はとりわけ具体的、かつ日常的であったために、反撥されかたも大きかったのである。それまでの心理学的研究、たとえば、RUMPH (1905), DEARBORN (1918), PARSONS (1923), HURLOCK (1929) の著書の内容は、初歩的段階の動物心理や民族的事例、また歴史的事例に相当程度の想像力を加味しての、カテゴリー4にふくまれうるような、教養的人間性論にちかいものだった。Flügel への反撥はまた、フロイド派のもつ基本的な考えかた、すなわち抑圧された性衝動のテーマが、社会的風潮の中にいくぶんは残っていた、ビクトリア朝風の空気にとって、不愉快なものであったのかもしれない。

とはいえ、精神分析学をふくめて、今世紀初頭の服装心理学のひとつの影響は、着装動機におけるいわゆる羞恥説 (modesty) にとどめをさし、象徴説・記号論の時代を決定的に方向づけたことであろう。その方向での、この時代の指針的な服装観は、Crawley の、〈Encyclopedia of Religion and Ethics〉vol. 5 の Dress項 (1912) の

記述である。

服装研究に社会調査の技術を用いる方法は、1906年に Flaccus が、ニューヨーク州の normal school の女生徒を対象に、アンケートによって、衣生活全般にわたるデータを得たのが、早い例である。Flaccus の調査目的をみると、“Changes in Self-Feelings, Fluctuations in Personality” であるとか、“Effects on the Self as a Social Reflex Phenomenon” といった項目がある。こうした微妙な精神の問題を問題とする一方で、相当に粗い質問内容—衣服の硬さや重さが、じぶんの心にどんな影響を与えるかなど—が構成されている。この時代に較べれば現代は、データの分析処理についての理論は、比較にならないほど巧緻になっているが、質問枠の精粗の点では、それほど変わっていない、といえる調査もみかけるのである。

この種の服装心理調査がもっともさかんだったのは合衆国であって、その応用的な実用面への社会的評価もすこぶる高い。その一方で、旧世界の、教養主義的人間性論とは異質の、官能の末梢的計量のみた忠実であるような一部の服装研究には、ものたらなさを感じる人もあるにちがいない。

その点はべつとしても、このカテゴリーにふくまれる研究にありがちなひとつの欠点は、服装そのものについての知識の甘さや、服装とそのファッションへの、感性的現実認識が欠ける傾向をもつことであろう。端的な例をあげれば、羞恥心は着装の動機ではなく結果であると説かれても、日常的には、羞恥心はやはり動機なのである。日常的なファッションについて、精密な計量的研究が意外な弱点をもつのは、いくぶん抽象的な言い廻しになるが、主題にたいするアプローチの方法に、しばしば非現実性があるためではないだろうか。

## 7. 生理学的研究

表15 生 理 学 的 研 究

---

WOOLSON, Abba Goold (edit.)	
“Dress—Reform”	1874
TREVES, Frederick, F.R.C.S.	
“The Dress of the Period: in its relations to health”	1882
HARBERTON, The viscountess	
“Reasons for Reform in Dress”	c. 1885
WARD, E. & Co.	
“The Dress Reform Problem: A Chapter for Women”	1886
WILLIAMS, W. Mattieu	
“The Philosophy of Clothing”	1890
LEOTY, Ernest	
“Le Corset: à travers les Âges”	1893

---

- 
- BALLIN, Ada S.  
“Health & Beauty in Dress from Infancy to Old Age” 1893
- FOWLER, O. S.  
“Intemperance and Tight Lacing: considered in relation to the Laws of Life” 1898
- O’Followell  
“Le Corset: Histoire—Médecine—Hygiène” 1905
- JORDAN, Alfred C.  
“Healthy Dress for Men” 1929
- WALKLEY, Christina, etc.  
“Crinolines and Crimping Irons—Victorian Clothes: How to They Were Cleaned and Cared For” 1978
- 

工学、医学の両専門領域にかかわる著述は、今回の対象文献にはふくめないのであるが、工学のもっとも実用的末端である裁断技術と、医学・生理学の大衆啓蒙の部分にかかわる著作とは、対象に加えている。

後者の部類に入る著作の大部分は、服装改良に関連するものである。改良服はほんのわずかの時期のずれで、わが国でも西欧諸国に劣らず、さかんに鼓吹、試作されたが、そのほとんどは、裁縫書の中の数頁をさいて、その製作法を説明する、という方法以上のことはなかった。

わが国で、和服と、西欧の衣服とを比較するとき、後者の長所として必ずあげられるのは“実用的”ということであった。そして事実、西欧風改良服は活動本位のものであり、スタイルも製作法も、具体的に説明されたのである。わが国のそれが改良服であるのにたいし、西欧のそれは、どちらかといえば服装改良という、ひとつの理念であり、あるいはそのような自覚が優先した点に、留意すべきである。もっとも名高い Bloomerism にしても、それは女性の地位向上のための運動であり、Bloomer 自身は、スキャンダラスな誤解を怖れて、あの有名な pantaloons をほとんどはかなかったという [GATTY 1967: 110-112]。

古代ギリシャ風のひだ状衣が、あるいは東洋的な脚衣が、理想服 (ideal dress) として提案されることはあっても、共通するところは、女性がみずからの肉体に有害な衣服を着なければならぬ社会、もしくはそういう意識からの解放の理念であった。

西欧一とくにイギリスにおいて、服装改良の気運のたかまりは、1850年前後、1880～1890年代、そして第1次大戦後である。まへの2回は、女性のコルセットが、その主要な攻撃目標であった。女性の生き方と、中産市民の生活全般の合理化とむすび、この問題には賛否両端が渦まき、服装と身体についての、この時代の西欧人の意識を知るための、生彩に富んだ材料が提供される。

対象とした文献のほとんどは、その第2のたかまりの時期に刊行されたもので、代

表的著作を尽していると考える。

このような昂まりの鎮静したあと、衣服の生理学的論議のおもな舞台は、教室と研究室に後退したのである。

8. 教養書・実用書

表16 教養書 (How-to-Dress Book)・実用書 (Homemanaging Book)

---

AMMONS, J.	“Gynœceum: or The Theatre of Women” 1872 (1586)
BUONI, Tommaso (Lucca)	“Problems of Beautie and all Human Affections” 1606
HEUQUEVILLE, Jean de	“Cinq livres des hiéroglyphiques où sont contenus les plus rares secrets de la nature et propriétez de toutes choses” 1614
ROBERT, J.	“The Lady’s Dressing Room” 1732
NIVELON, F.	“The Rudiments of Genteel Behavior” 1737
GENLIS, de, (Madame la Comtesse)	“Dictionnaire critique et raisonné des Étiquettes de la Cour” 1818
AGOGOS	“Hints on Etiquette and The Usages of Society, with a Glance at Bad Habits” 1834
WALKER, Alexander	“Female Beauty: as preserved and improved by Regimen, Cleanliness and Dress” 1837
Etiquette for Ladies	“Etiquette for Ladies” 1855
KERCKHOFF, E.	“Le costume à la cour et à la ville: Étiquette tenue officielle et de fantaisie” 1865
EASTLAKE, Charles L.	“Hints on Household Jaste in Furniture, Upholstery and other details” 1868
Thoughtfulness	“Thoughtfulness in Dress” 1868
OLIPHANT	“Dress” 1878
DECORUM	“A Pratical Treatise on Etiquette and Dress of the Best American Society” 1879
The Lounger in Society	“The Glass of Fashion: A Universal Handbook of Social Etiquette and Home Culture for Ladies and Gentlemen” 1881
BARNETT, Edith A.	“Common-Sense Clothing” 1882
HOWARD,	“Etiquette” 1885
The “Major” of Today	“Clothes & the Man: Hints on the Wearing and Caring of Clothes” 1900
PRAGA, Alfred	“What to wear and when to wear it” 1903

---

- 
- LUXMOORE, Marjory  
“A Dictionary of Etiquette” 1911
- MEEHAN, Abby  
“The Ladies’ All-British Fabric and Fashion Book” 1911
- BRAY, John  
“All about dress: being the story of the dress and textile trades” 1913
- WINTERBURN, Florence Hull  
“Principles of Correct Dress” 1914
- BALDT, Laura I.  
“Clothing for Women: Selection, Design, Construction—A Practical Manual for School and Home” 1917
- FORESTER, C. W. (The Hon.)  
“Success through Dress” 1925
- TERRY, Eileen  
“Etiquette for All: Man, Woman or Child” 1925
- VALLÉE, Elise  
“The Well-Dressed Woman’s Do’s and Dont’s” 1925
- FORBES, Angela (Lady)  
“How to Dress: For All Ages & Occasions” 1926
- RIVKIN, David  
“The Art of Dressing Well” 1926
- DOOLEY, William H.  
“Clothing and Style” 1930
- BUTTERICK, Helen Goodrich  
“Principles of Clothing Selection” (revised ed.) 1930
- STORY, Margaret (Mrs. Chester B. Story)  
“Individuality and Clothes” 1930
- STATE, Dorothy  
“The Bride’s Book” 1935
- WALLIS, Reginald  
“The New Adorning: The Spiritual Significance of Dress and Clothing in Word of God”  
1938
- BELL, Quentin  
“On Human Finery” 1947
- DIOR, Christian  
“Christian Dior’s Little Dictionary of Fashion” 1954
- KAY, Hether  
“A New Look at Marriage and the Home” 1961
- DARIAUX, Geneviève A.  
“Elégance” 1964
- WILKERSON, Marjorie  
“Clothes” 1970
- Men’s Dress Reform Party  
“Men’s Dress Reform Party” 1929—
- 

衣生活についての日常的な心得、役に立つ実際的な知識が、このカテゴリーにふくまれる著作の内容であり、研究的性格のものではない。

いわゆる *etiquette book* と、家事整理のコツといったたぐいの本とでは、内容に

ひらきがあるように思えるし、英国図書館のカタログでは、後者は *homemaking* になっている。しかし女性の、とくに結婚している女性のための、賢明な生活の手引きといった意図でかかれた装いの指導書は、なんらかのかたちで、このふたつの話題に触れないことはない。

こうした、“よい装いのための教本”の著者は、かつては名流夫人が一ときにはその名を伏せて一執筆することが多く、近年は高名なドレスデザイナーであるとか、映画女優などの、いわゆる有名人がしばしば執筆している。けれどもこの種の本は、一般には単なるスタンダードを提示するだけが目的であって、著者の個人的意見はさほど重要ではない。名流夫人が匿名で書いたものも、あやしげな元女優の文章も、その履歴による説得力に頼るのみで、本来無名性のつよいものである。婦人雑誌社の編集によるものの方が、むしろ権威があるともいえ、要するに具体的で、懇切で、したがって頁数の多いものがよるこばれる。

第1次大戦後、エチケットブックがよく売れたのはアメリカであった。アメリカのエチケットブックは、とくにフランスにくらべると、概してまじめな語り口の実用本位のものが多い。また、版を重ねるあいだに部分的に見解の異同を生じ、その点も好箇の研究材料となる。

## 9. 裁縫書・デザイン論

表17 裁縫書・デザイン論

---

COOK, M.	“A Sure Guide Against Waste in Dresses: or The Woolen Draper’s, Man’s Mercer’s and Tailor’s Assistant” 1787
The Tailor’s Complete	“The Tailor’s Complete Guide; or A Comprehensive Analysis of Beauty and Elegance in Dress” 1796
BYFIELD, Robert	“Sectum: being the Universal Directory in the Art of Cutting” 1825
LINDSAY, W.	(“System of Cutting”) 1828?
JACKSON, John	“The Tailors’ Director, or Anatomical Critic” 1830
MANWARING, H.	“The Tailors’ New Guide; Being an Universal and Complete System of The Art of Cutting” 1836
WAMPE, Henry	“Instruction, Mathematical Proportions & Construction, of Model for Gentlemen’s Dresses, applicable to the various shapes of the human body & to the every fashion” 1837
WALKER, W. E.	“An Introduction to The Art of Cutting; and a Refutation of the System adopted by Oliver, the American” 1840
	“A Catechism of Cutting” 1844

---

- 
- HOWELL, M. J.  
“The Handbook of Dress-Making” 1845
- WOOD, John  
“A New and Complete Practical System for Cutting Trousers” 1847
- WAMPEN, Henry  
“Draping the Human Figure” 1853
- COMPAING, Charles etc.  
“The Tailors’ Guide: A Complete System of Cutting Every Kind of Garment to Measure”  
1855
- DEVERE, Louis  
“The Handbook of Practical Cutting” 1865–1866
- BLANC, Charles  
“L’art dans la parure et dans le vêtement” 1875
- WALKER, Isaac  
“Dress; As It Has Been, Is, And Will Be” 1885
- HOLDING, T. H.  
“Ladies’ Garment Cutting” 1890
- STEELE, Frances Mary, etc.  
“Beauty of Form and Grace of Vesture” 1892
- TOMLIN, J.  
“The Bond Street Systems of Cutting” 1893
- SLADDIN, W. H.  
“Shoulderology!” “Bustology!” 1896
- HOPKINS, J. C.  
“The 20th Century System of Ladies’ Garment Cutting” 1901
- THORNTON, J. P.  
“The Sectional System of Ladies’ Garment Cutting” 1901
- CARLISLE, E. M. F.  
“A Practical Method of Dress Cutting for Adults” 1902
- SYNGE, M. B.  
“Simple Garment for Infants” 1914
- BALDT, Laura I.  
“Clothing for Women: Selection, Design, Construction—a Practical Manual for School and Home” 1929 (1916)
- KELLAND, C. M.  
“The Kelby-Kelland System of Dress-Cutting” 1925
- KNEELAND, Natalie  
“Negligées” 1925
- TRAPHAGEN, Ethel  
“Costume Design and Illustration” 1932 (1918)
- BROWN, Clara M. etc.  
“Clothing Construction” 1934 (1927)
- MIALL, Agnes M.  
“Home Dressmaking” 1933
- BRISCOE, Jessie  
“Principles of Dressmaking” 1936
- MASON, Gertrude  
“Gertrude Mason’s Pattern-Making Book: The principles of Pattern cutting applied to lingerie, blouse, skirts and sports wear” 1937
- FRANKS, Catherine, A.R.C.A.  
“The Pictorial Guide to Modern Home Dressmaking” 1940
-

- 
- WINGO, Caroline E.  
 “The Clothes you buy and make” 1953
- COREY, Marian  
 “McCall’s Complete Book of Dressmaking” 1954
- HILLHOUSE, Marion S.  
 “Dress Selection and Design” 1963
- WARDEN, Jessie A. etc.  
 “Principles for Creating Clothings” 1969
- HOLLANDER, Anne  
 “The Fabric of Vision: The Role of Drapery in Art” 1975
- HAMARE, Ida, etc.  
 “Making Simple Clothes” 1980 (1978)
- FOSTER, Betty  
 “Creating Fashion” 1983
- 

衣服の裁断，縫製の技術に関する著書は，19世紀の末までは，ほとんどが専門技術者を対象に書かれたものだった。19世紀のイギリスは，tailoringの技術をほぼ完成したといわれる。しかしその時代はまた，構造設計の方法をめぐる，とくに breast measurement の是非をめぐる，はげしい論戦の行われた時代で，ロンドンの裁断師により，たくさんの cutting book が著わされた。それらの技術論の前提には，よい衣服とはなにか，という命題のあったことはいうまでもない。よい衣服の理念は，それにつづく具体的な技術論のように，意見の分れるものではないけれど，その説明の言い回しの中に，さまざまのニュアンスがあり，その集約は，西欧人の衣服観を知るうえで，大変参考になる。

これらの技術はほとんどがテーラリングであったが，19世紀末頃から，dressmaking についての指導書が急増する。そしてこちらの方は，家庭女性がおもな読者であったようである。ドレスメーカーブックは，女性服としての性格上，デザインングについての言及が多く，やがてデザインングの指導書が独立し，さらにそこから，イラストレーション，あるいは (fashion drawing) が分離する。

多い年には，1年に5，6冊も刊行されるこの種の本の，全体にわたって言及するのは，それらの内容の類似性からいっても，やや不経済に思えるので，衣服の構造理念についての，総論的見解にみるべき特色のある著作だけを，ここに選びだしたのである。

### 3-3 各期別の認識内容

#### 3-3-1 前西欧型衣服に関して

布形衣，あるいはひだ状衣が，前西欧世界，とりわけ地中海世界の，特定の衣服で



あったという事実に、触れない服装史はありえない。西欧の中世が、古代からの遺産のひとつとして、そうした布形衣を、直接には古代ローマから、あるいはより血縁的な父祖たちとから継承したこともまた、事実として述べられる。したがって中世人がその造形作品に、古代の人というシンボルとして *toga*、あるいはそれ以外の布形衣をえがいたこと [ENLART 1916: preface]、また実生活での布形衣の着用が衰えるにつれ、形式的な用途に限られてゆくこと [KÖHLER 1928: 153, 163, 173; PAYNE 1965: 168; CONTINI 1965: 15, 66–71] も指摘される。

しかし次項で詳細に考察するように、布形衣は、日常的着用の現実でこそ、過去のものという意味で、前西欧的であったが、一方ではこれを、古典として観念的に憧憬する態度は代々うけつがれ、今日までその錯綜した心情に支えられてきた、といえそうである。

こうした見方にしたがえば、布形衣を単純に、前西欧的のみならずことは誤りである。密着的な円筒衣を、12, 13世紀とそれ以降の西欧型衣服の標準とした場合、これに対応するものの代表的なタイプのひとつは、むしろある種の前方開放タイプであったろう。このタイプのうち、中世の西欧人にもっともなじみの深かったのは、*caftan* に関連する東方の衣服であったかとおもわれる。聖書の主な舞台が、西欧人にとっては東方であったから、イエスと、イエスを繞る教会の聖者たちを東方の人として描くことは、けっしてなかったにもかかわらず、イエスに敵対するひとびとや、異教徒たちは、しばしば東方風の服装で描かれた。ヘロデとその家族に、*caftan* を着せた14世紀の例 (写真 B-46) もそのひとつである。

Boucher は、近東のこの *caftan* 系衣服—前方開放形式 (*vêtement endoussé*)—の西欧世界への導入を、13世紀のイタリア、14世紀のフランスとしている。そのほか、十字軍の手でもち帰られたもの [KERCKHOFF 1865: preface]、オスマントルコとの接触によるもの [GERVERS 1945: 64] などニュアンスのちがいはあるものの、受入れの時期やかたちに関しては大体一致し、それが西欧の衣服にある程度は受容されながら、しかし結局、中心的な様式のひとつとまではなりえなかった、という点も、史家に共通する認識である。東方風の文物の影響をつよく蒙り、その豪華さになずんだ、東ヨーロッパ諸国の16～18世紀の君主たちでも、*caftan* を入手して所有することの熱心さほどには、実際には着用せず、多くはそれらを解体して裏地に使ったり、または室内装飾の用にあてたりした、ということである [GERVERS 1982: 12, 13]。

われわれにとっての関心は、15世紀前後におけるその様式成立後の西欧型衣服は、男性外衣についていえば、むしろ前方開放型が標準であるにもかかわらず、おなじ様

式の *caftan* のどの点に対して異和感を抱いたか、という点である。

そのことはしかし、それほどむずかしい問題ではない。たとえば *gippon* と較べての *caftan* の、もっとも目立つ違いは、開放された左右の身頃を突合わせるのではなく、深い打合せにして、その外に帯をまくという点である。西欧の場合この形式は、その後一般にくつろぎの部屋着としてのみ、用いられてゆく。突合せか打合せか、ボタンで留めるか帯によるか—ある意味ではさしたる違いとも思えないこの点で、西欧服装はその独自性を譲ることなく、*caftan* からキモノに至る、東方的特色とむかいあっている<sup>56)</sup>。

布形衣から定型衣への歩みのなかでの、毛織物の果した役割については、かつてはせいぜい Hartley の示唆でいどの [1931: xiv]、浅い認識しかはらわれていなかった。しかし比較的近年になって、毛織物素材がひだ状衣の立体感に及ぼした効果であるとか [ŠROŇKOVÁ 1954: 84]、おなじくテーラリングの発達への寄与 [LABOVITCH 1944: 172] といった指摘が、おもに東欧圏の研究者によって、なされている。

この点について重要な意味をもつ、熱プレスアイロンの使用に関しては、古くは QUICHERAT [1875: 147]、また Beaulieu の言及 [1951: 89] 等もあるが、その使用目的についての、具体的考察は欠けていた<sup>57)</sup>。

Blanc が前世紀の半ばに、布をパイヤスにつかうことの西欧的意味を指摘し、それがひだの美にたいして有効であること、したがって逆に宗教的服装においては、そのやわらかさを避けて、布目を身体に添わせてつかう [BLANC 1875: 233] と言っているのは、正しい着目である。とはいえ、この程度のードレスメーカーの常識にすぎない—素材と技術の問題さえも、布形衣から定型衣への展開を語る服装史の中で、その具体的位置づけが、ほとんどなされずに見過ごされてきたことは、ふしぎといえなくはない。

### 3-3-2 身体順応系の衣服に関して

衣服をからだに密着させて、からだの凹凸をあらわすことと、からだ、特に胴を細

56) 西欧人の見た *caftan* については、旧稿でものべている [大丸 1984: 549, 550]。そこでも指摘したとおり、現代でも西欧人が、打合せと帯とに、東方的特色をみる点は、変っていない。

57) ただし、縫製の段階で、実際にアイロンを用いて、のぼし (stretching) やいせ (shrinking) を行ったという、15世紀当時の文献的証拠があるかどうか、私にはなんともいえない。テーラリングの技術が最高の水準に達し、また沢山の tailoring-book が刊行された19世紀でも、アイロンによるくせづけ技法の具体的説明はめずらしく、1865年の刊行と考えられる、Devere の著書 (図10) 以前には、現在のところ私にはみつかっていない。17世紀の文献としては、Boullay の〈The Sincere Tailor〉中、gentleman's coat の製作解説中に、それを暗示するような記述はあるが [GILES 1887: 78]。(図10は次頁へ)

く見せることは別の問題である。しかし西欧での場合、12世紀以降の密着衣によって示されるような強い肉体意識が、細い胸部の官能的魅力にとくに執着した、というふうに考えられる。細い胸への執着が、西欧服装の特色の中でもとりわけ特異なものと考えられるのであるが、それは実は乳房の豊かな隆起と、腰・臀部の張りという、異性の眼を確実に惹きつける第2次性徴を、強調するための手段にすぎないとは、ひとつの通念としていわれてきたことである。Taboriはこの点で、西欧人がコルセットによって、乳房をより膨らませて見せたのは、乳房讚美のあらわれと自讚し、それを知らないひとびとは、“bosom-blind”であると憐れんでいる [Tabori 1961: 91, 92]。また、服装改良運動時の論客 O’Followell も、ヨーロッパ人のコルセット論は、胸を締めることと、乳房の整形のふたつに跨がっていることを指摘した [O’FOLLOWELL 1905: 196~200]。

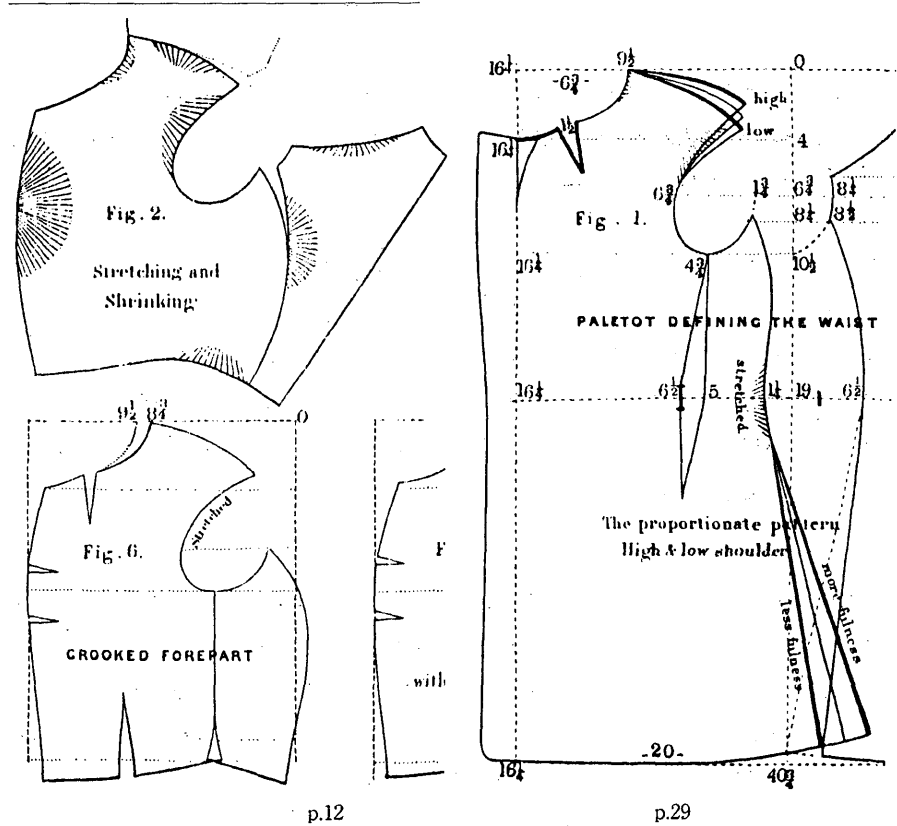


図10 アイロンによるくせづけを図示した19世紀の裁縫書 Devere, L.

〈The Handbook of Practical Cutting〉(1865c?) による

このような、身体凹凸、あるいは屈曲の強調は、女性だけにみられたことではない。それはわれわれがすでに観察してきた事実であるが、15世紀の gippon の、あの誇張された体形を、男性の理想とみるのである。「みごとに鍛錬された中世騎士の、つりあいのとれた肉体は、ほっそりした美しさと、逞ましい体格への崇拜をあらわしている。そして彼の衣服も、このおなじ理想を示す」[GRANCSAY 1931: 195]。

Challamel は、フランス人がほっそりとした肉体のうつくしさを知ることになったのは、14世紀のことであり、それが胴体を締めつけることのはじまりにつながった、という [CHALLAMEL 1881: 48]。もちろんこれに対し、からだの線の魅力によって、人を惹きつけようとするのは、娼婦や、不行跡な女のすることだ、という、同時代のモラリストの立場からの非難はあったけれども [AMMONS 1586: xxxv]。

“理想的な肉体”をつくるための、胴着 (stays Eng.) による、胸・腹部の極端な緊縮は、19世紀の後半とそれ以後になると、しだいに退けられた。けれども、衣服美の根幹にはからだの美がなければならないという前提には、なんの変化もありえない。20世紀になるとこの種の議論は、主としてデザインングブックの領域に入るのであるが、19世紀末から今世紀初めの代表的な著者たちも、口をそろえてこの点を強調している [STEELE 1892: 150-152; CARLISLE 1902: 7; BALDT 1916: 61; HAWEIS 1879: 32]。

Planché によれば、女性衣服の強い締めは、12世紀初頭にはすでに見られるという [PLANCHÉ 1900: 127]。一方、すでにその時代には、昆虫状にくびれた体形の人物を、われわれは手写本挿絵中に、ふつうにみることができる。近年 Scott は、体型の嗜好の時代的推移についての、詳細な考察をおこなった [SCOTT 1980: 39-56]。肉体のかたちにたいするこれほどの執着を、われわれの文化は経験したことがない、と断言できるであろう。

\* \* \*

布形衣から円筒衣への推移は、中世といわず、西欧服装史のなかのひとつのドラマであったから、その経過についての諸家の言及もすくなくない。

布形衣から発展して円筒衣のある形が生じる、あるいはふたつの間の中間タイプの指摘など、様式転換の具体的な態様についての叙述では、つぎの諸著作が重要である。まず、Enlart は13世紀から14世紀にかけての、中間タイプの代表としての garnache をあげ、そのほかにも各種の擬布形衣—*housse*, *hargan* などの例を示し、*manteau* にまず手を通すための切れ目が作られ、やがてそこから袖つきの布形衣 (*chape à manche*) ができたことを示唆する [ENLART 1916: 48, 68]。また、Köhler は14世

紀のスペインと、15世紀の諸事例を [KÖHLER 1928: 202, 209], Norris が、13世紀に *cyclas* から *surcote*, *gardcorp*, 14世紀におなじ *cyclas* から、*sideless gown* の発生を [NORRIS 1927: 152, 167, 215, 217], Harmand が、14世紀に *tabard* を、あまりひだが多いと紋章がみえにくいため、*robe* 風に仕立てるようになったこと、また *cotte d'armes*, *tabard* に袖代わりの、インパネスタタイプの *épaules* をつけたことを [HARMAND 1929: 265], Evans が15世紀における、円形 *mantle* から *poncho-like coat* への裁断の自然な変化を [EVANS 1939: 19], Šroňková が、14世紀末のボヘミアにおいて、単純な布形衣に *sew on collar* のつくようになった経過を [ŠROŇKOVÁ 1954: 80] など、それぞれ具体的な指摘が行なわれている。布形衣自体を、よりからだに密着させるための工夫に関連する例としては、右肩の固定のボタンを数箇並べる、14世紀の典型的な方法など [PAYNE 1965: 181], 一般に布形衣のからだへの密着の工夫 [CALTHROP 1906: 17; KÖHLER 1928: 154] が指摘されている。

うへの引用の、いくつかにも含まれていたのであるが、布形衣と円筒衣とを区別する、重要なポイントのひとつは、袖の有無である。いわゆる擬袖については、Norris が *surcote* のそれに触れているほか [1927: 167, 217], Harmand が手写本からのさまざまな例をあげている [1929: 265, 266, 270]。

ところで、布形衣ないしひだ状衣が衰え、より密着的な円筒衣が用いられるようになったのは、どういう理由によるのか。Calthrop は、その親しみやすいイギリス服装史の中で、13世紀後半を *draped man* から *coated man* への過渡の期間とし、ゆったりと垂れた布は、非常にゆっくりとだが、からだの形を持つようになった、それはひとびとが、より活動的な生活への関心を示しはじめたためであり、1272年頃に、布形衣に切れ目を開き、“自由さを得るために”，腕を貫いた、とのべる [CALTHROP 1906: 67, 69]。また、Newton は14世紀フィレンツェの若いひとびとが、ひとりで着られないような、軽快さを欠いた衣服を好まなくなった、と説明する [NEWTON 1980: 6]。Boehn は、とくに *toga* が廃れてBタイプの布形衣にかわった事情として、前者の着方のむずかしさ、後者の実用的で着心地のよいこと、をあげている [BOEHN 1932: 169]。これらの説明の多くは、変化のための条件ではあっても、布形衣が“嫌われた” [EVANS 1950: 34] ことの、直接の理由ではないとも考えられるが、ともあれ、14世紀を過ぎた時代には、布形衣が過去のものになりつつあった事実は、確かにとらえられている。

布形衣の退潮とそれに伴う形式的用途への転化 [BOURRILLY 1928: 51; KÖHLER 1928: 163, 173, 201; PAYNE 1965: 168; HANSEN 1972(1956): 122] の中で、布

形衣の理念化の現象がみとめられる。Newton は、中世の知識人たちの心の底には、“古代の、そして誇りたかい服装の、ほとんど種族的記憶 (tribal memory) ともいうべきものが、生きながらえていた。それは古代ローマの、toga, chlamys, pallium といったものの、漠然とした思い出であった” [NEWTON 1980: 6] と書いている。こうした想いは、いわゆる mantlephile (マント嗜好癖) の淵源のひとつといえよう。また、かならずしも衣服としてではないが、Hollander は、ルネサンス以後の美術作品中の着衣における、drapery 観について論じている。著者はそこで、衣服が実際には密着的で硬いものになっても、人々は絵の中では依然として、やわらかで豊かな波をうつドレーパリーに固執しつづけたことを、ドレーパリー讃美の文を引用して説明し、“そういった衣服を着せたからといって、その人が tailored tweed を着たときよりも、高貴で礼儀正しくなった、という証拠はない。にもかかわらず、ドレーパリーの観念と、より善い、より美しい生きかたの観念の結合は、過去何百年かに蓄積された美術作品の、説得力ゆたかな襲の美に支えられて、栄えている” [HOLLANDER 1975: 417] と言っている。

Newton は文化の伝統の面から、Hollander はどちらかといえば感性的意味合いにおいて、ひだをもつ衣服の魅力をのべた。しかし西欧人の心情のなかで、このふたつが割り切れるものではあるまい。ともあれこうした心情の基底にあるものは、西欧人の、古代地中海文明思慕の情であるように思える。

服装における古典古代の讃美は、一般には19世紀末の服装改良運動における、いわゆる ideal dress とむすびついていることが多い。そしてその具体的内容は、からだを緊縮・拘束せず、できるだけ自然に近い状態を保とうとすることであった。こうした観点は、Hollander のような、ひだ状衣への感性的な惹かれ方にくらべると、いくぶん思想的でもあり、また実生活的な態度、といえるかもしれない。したがって、おなじく古典古代の服装を規範としても<sup>58)</sup>、純粹の布形衣に固執するというのではなく、コルセットを使用しないこと、たっぷりと布地を用いた衣服であることが目標であった。そのために Marais のような、密着化以前のメロビンガ王朝までの一西欧を規範とする考えかたもあった [MARAIS 1914: 9]。

西欧服装の、また服装観の全体の流れでみるなら、日常生活の中にそれをうけいれようとするひだ状衣讃美は例外的であり、そのような主張は、比較的限られた期間のものだった。ひだ状衣は、人格の劇的表現の手段としては、欠かすことのできない道

58) 服装についての古典古代の讃美の対象は、ふつうギリシャであることが多い。以下その例を示す。—WALKER 1837: 15; WARD 1886: 9; STEELE 1892: 56, 57; BALLIN 1893: 3; GRATEROLLE 1897: 116; UZANNE 1902: 99.

具として重んじられてきたが、一般にゆるみの多すぎる衣服は、西欧人の日常のおもな衣服としては好まれず、間欠的な流行も、長つづきはしないのがふつうである。

\* \* \*

衣服の密着化とそれにつづく硬化とは、袖の構造にもっとも重要な改良を求めた。和服と比較するまでもなく、西欧衣服の袖は複雑な特性をもっている。しかし、そのバラエティの歴史的推移をたどるについても、ほとんどの著者は単に、袖の外見的なかたち—leg o'mutton であるとか、bishop であるとかの変化を羅列的に、数多くのべるにとどまる。

1890年代の終りに、いわゆる Magyar-kimono sleeve が、当時の西欧衣服にひとつの衝撃をあたえたのは、それが単に外見的なスタイリングの問題ではなく、従来の袖の構造理念からみれば、全く異質のものだったためである。キモノスリーブの構造は、袖が身頃と連続した裁ちだしになっている。この構造は古代の円筒衣では一般的であったから、キモノスリーブは非西欧的であると同時に、前西欧的なものであったことになる。

西欧の円筒衣が裁ちだし構造を捨てざるをえなくなったことの、もっとも大きな理由は、円筒衣の密着化によるものであったろう。まず、腕の密着化—袖つけ部分をふくめた、上腕部のある程度の狭まり—は、身幅がある程度たっぷりしていさえすれば、腕の上げさげに、それほど支障はきたさない。また、裏打ちや詰めものによる、衣服のある種の硬さがなければ、腕の運動はさほど窮屈ではない。腕の運動にとって不都合な、これらの条件が出揃って、袖つけの構造になんらかの改良が必要となったのは、まえに触れように15世紀にま近い時期であったとおもえる。

袖つけにゆるみを与える、もっとも手がるな方法は、袖つけを一部切り離すことである。また袖を体幹部とは全く別のものとして、必要に応じてピンまたは紐で留めるという方法もある。しかし著者たちの多くは、その袖を貴婦人がお気に入りの騎士に与える習慣であるとか、袖だけを売っていたとか、着用のごとに妻や、小間使いがそれを縫つけなければならない、とかの言及はあっても [QUICHERAT 1875: 183; ENLART 1916: 62, 63]、その構造的意味には触れることがない。この detachable sleeves と関係のある ailettes または épaulettes (いずれも Fr.) についても、Enlart はその文献的初出を14世紀はじめと示しながら、その理由をとくに追求はしなかった。したがって以下にあげる著者たちの例は、全体からみれば大変めずらしいといえよう。

袖つけの構造のうち、とくに pourpoint をより密着的にするため、13世紀に入っ

て、山と谷のある袖つけ曲線が生じたことの指摘は、Köhler にはじまるであろうか [1928: 153]。さらにより重要な、アームホールの寸法より、袖側の寸法を長くとり、袖側にタック、ギャザーによるある程度のふくらみをもたせて、アームホールに挿入する、という技法について、これを歴史的にとらえて言及したのは、Norris が最初の一ひとりではないだろうか [1927: 153]。ただし、セットイン構造の近代的技術は、18世紀から19世紀にかけては完成されたものとなり、いいかえればよい仕立てとして日常化したわけであるから、総合的批判、教養・実用書、裁縫書の中で、現在のものとしてのべられたセットイン論議は、ここでとりあげる対象に入らない。

これにたいして近年の研究者たちは、袖つけの構造への言及も具体的になりつつある [PAYNE 1965: 169; SCOTT 1980: 78; NEWTON 1980: 3]。その言及の中で、私がとくに重くみる必要があると考えるのは、袖つけのふくらみ (fullness)、および持上りに関してである。

袖つけの袖側にゆるみをとって、アームホールにインセットすれば、袖側がある程度ふくらむのがふつうである。しかし西欧服においては、このふくらみが、いわゆるパフスリーブの場合でなくても、強調ないし誇張される傾向があった。19世紀においても Haweis は、袖つけ部分に適切なふくらみをもつという点において、セットインがもっともよい袖つけ方法であるとのべた [HAWEIS 1879: 77]。けれどもこの点に関する歴史的な言及は、私は寡聞にして、Harmand が、gippon の肩のパフを支えるため裏打ちをした、と指摘した例以外を知らない [HARMAND 1929: 162]。

袖つけのふくらみとつながる技術に、ひだ寄せの方法がある。15世紀後半にさかんに認められるパフスリーブはギャザースリーブであったから。ギャザリングへの西欧人の関心と言及は乏しくない。Burnham は、西欧の folk costume の特色は、ギャザリングによる立体化の造形であり、とくに衿もとと袖についてはそのことがいえる、とのべた [BURNHAM 1973: 17]。この見方は、われわれが今日、ほぼ納得できる事実であろう。Gervers はそうした民俗的技法は、中世にさかのぼるものであり、中世からルネサンスにかけての shirt の、布地をたっぷり使った豊富なギャザリングがそれである、と言っている [GERVERS 1975: 65]。さらに Evans は、そうしたひだやふくらみを、アイロンによって麻の内着にほどこす技術が、12世紀中ばにうまれたものと推定する [EVANS 1952: 5]。Evans はとくにその根拠を示していないが、ギャザースリーブでの確認される、もっとも古い造形作品資料は、大体1260年頃の制作とされる、BM. Ms SLOANE 2435 中の例、ということであるから [HOUSTON 1939: 8, 9]、Evans の見解はこの事実を根拠のひとつとしているのかもしれない。



ひだを寄せるという技法は、もともと単純で、自然発生的な行為であるから、この技法をもたない文化は、むしろめづらしい。和服と比較した場合、西欧のひだの特色は、しばしば、布表面の丸みづけ、ふくらましの目的に、用いられる点であろう。であるから、上に引用した Burnham のことばは、民俗服にとどまらず、西欧衣服全般に敷衍して、あてはめてよいと考える。

### 3-3-3 西欧型衣服に関して

私はこの考察のはじめの部分で、*tailoring technic* の基礎の成立期について、これをおよそ15世紀のはじめとする意見を紹介した。本項のはじめに、それらの意見もふくめて、テーラリングとはなにかに関する、西欧人の考えかたを検討したい。

テーラリングとは、単なる衣服の製作とは別の技術であるという自覚が、とりわけイギリス人の間にはみとめられる。そしてその技術を完成させたのは、イギリス人であると—[MEEHAN 1911: 26, 34; FORBES 1926: 45; RIVKIN 1926: 26; CUNNINGTON 1948b: 70]。単なる衣服製作は、“*clothes-making*”である。また Newton は、14世紀中ばのイギリス王家の仕立人として、*Tassin du Bruil* を *King's tailor* とし、*Jean Perigon* なる者は、より低い水準の職人で単なる *couturier* であるとしている [NEWTON 1980: 57, 58]。クーチュリエすなわちドレスメーカーにたいするテーラーとは、男女服の区別を示すばかりでなく、技術の難易、高下を意味するとの考えかたが、ここにはあきらかである<sup>59)</sup>。

それではそのテーラリングとはなにか、についてであるが、イギリスにおけるテーラリング技術の完成期とされる19世紀半ばから、今世紀はじめにかけてのロンドンのテーラーたちが、口を揃えて主張するよい仕立の条件とは、なによりもまず、よい *fit* である<sup>60)</sup>。ただし、フィット性はドレスメーカーでも目的とされるので、このことばだけをもって、テーラリングとはなにかを説明したことにならない。これにたいしてやや付加的な説明を行った例として、たとえば Scott は、テーラリングはよい

59) 女性服は裁断の良し悪しよりも、ファッションに左右されるものとの考え方から、裁断論のおもな対象としないという態度があり、19世紀の代表的な技術史の著者 Giles もそのひとりである [GILES 1887: preface]。この見方によれば、男女服の区別がすなわち、技術段階の区別とも一致することになる。

60) “*fit with ease, elegance and taste*” [Cook 1787: V]; “テーラーの仕事は、からだにフィットさせること” [TAILORS 1796: 7]; “*ease* とエレガンスとをもって、人体にフィットさせること” [MANWARING 1836: iii]。

ただし、テーラリングということばの、日常的な用いかたとしては、もっと単純な考えかたの方がふつうであろう。Nevinson が、*cut-and-sew* した衣服を、すなわちテーラード・ガメントとよんでいるなど、その例である [NEVINSON 1965: 51]。

フィッティングの技術であるが、とりわけ袖つけのヨーロッパ的構造がその中心である、としている [SCOTT 1980: 78, 84]。また Does は、からだの採寸をして衣服を製作するところに、従来の仕立人がテーラーにかわる13世紀の曲り角を見、あわせてほっそりとした外見のためのボタン留めや、理想的な体形をつくるための詰めものの工夫をこれに加えている。このような具体的な指摘は、それぞれに重要であるが、結局その中心にフィット性の問題が横たわり、その検討なしには前にすすめないことがあきらかなので、ここでフィット性についての、諸家の意見に耳を傾けてみよう。

フィット性の内容については、素人のあいだにはときおり誤解があって、それは身体に密着していることが、すなわちフィットと考えるのである。服装関連書の著者であれば、そうした単純な同一化はありえないが、とはいえ、フィットをどちらかといえば即物的にみる見方と、その反対の立場とがある。

たとえば、19世紀初めまで生きた美学者の Alison は、目的に合致した手段こそフィットネスであるとし [1790: II, 118]、Rivkin はおなじ趣旨で、よい趣味とはフィットネスのセンスを育てることであるとして、これに T.P.O. の意味をふくませた [RIVKIN 1926: 24, 25]。また、《Thoughtfulness in Dress》の著者は、要するにそれは着る人に似合うかどうか、の問題であるとするなど [Thoughtfulness 1868: 282]、理念的な見方を示している。

これに対して、からだに密着的に衣服を構成することのみを強調した人もいないではない<sup>61)</sup>。しかしある程度の用意をもってこのことばを使うひとびとは、tight fitness ないし closely fitting から、それほどではないまでのある範囲を意味させて、その範囲の内部でこの概念の内容を議論するのが通例である。

フィット性の範囲をひろく見て、その中で具体的な段階を示すのは、裁縫書によくみうける意見のタイプである。Tomlin は、フィットには3種あり、それを 1). smart city coat, 2). West End coat, 3). easy fitting workingman's coat とする [TOMLIN 1893: 5]。似たような区分は、[HOLDING 1890: 54], [HOPKINS 1901: 4] も試みて

61) 技術を離れた立場の著者が、要約的な敘述を行う場合には、“しわひとつないまでにぴったり仕立てる技術” [QUICHERAT 1875: 252] といった表現があっても、それがかならずしもその人の本当の考えであるとはいえないが、同様のいい方—“フィット性のごく良いものは—運動機能に劣る” [HAWES 1879: 72]。また Burnham が、“古代地中海にくらべて東方世界の織物は幅狭であるため、縫合わされた衣服はどちらかといえば、からだにフィットする” [BURNHAM 1973: 3] というようないいかたの場合も、ことばに厳密さを必要としないと考えてのことであろう。

Gill が、テーラーメイドとは、肉体へのフィットであるのにたいし、ドレスメーカーとは、着る人の人柄にふさわしい衣服を作ることである [GILL 1931: 50]、という場合も、狭い意味につかわれたフィットである。

いる。Hopkins は第3のフィットを“wholly loose fit”と表現し、また Steele にも、tailor-fit に対しての“country-fit”という表現があって [STEELE 1892: 102, 103]、それはいわばだぶだぶの衣服をさす。このようにみると、フィットということばは、ひとつの価値基準をさすのみで、その程度—この場合についていえば密着そのものを意味するのではないようにもうけとれる。しかしおそらく、それはここに紹介した意見が、比較的短い特定期間に集中していることとも、関係があるのではないだろうか。なぜならば、たとえば Cunnington は1948年の著書の中で、“50年まえには、Smartness はまだ、tightness のことだった”と書いた [CUNNINGTON 1948a: 184]。すなわち Cunnington によれば、19世紀末から20世紀初めにかけては、からだに密着した衣服についての見方の、動揺期あるいは転換期であったことになるのである。Ward は、「タイトドレスは14世紀にはじまり、一時期を除いては、今日まで続いてきたといわれている」と、1886年に書いている [WARD 1886: 9]。それにわずか先だつ1879年に著わされた作法書には、「人と一緒にとる朝食では wrapper (ゆるい上張り) のようなものではなく、からだにぴったりフィットしたドレスを着なければならぬ」[DECORUM 1879: 271] とのべられている。1890年代前後がひとつの動揺期であったことは、この時期が反コルセットの服装改良運動の、もっとも昂まりをみせたときにあたることを考えあわせれば、納得できるだろう。コルセットは、主として女性のものであり、テラーメイドは、主として男性のもののはずであるが、肉体を拘束してのぞましい定型を得るという思想と技術においては、とくに男性女性の区別がなかったとみることができる<sup>62)</sup>。

われわれは今日、適切なフィットとはなにかという問の答えとしては、たとえば、心理学者の Dearborn の詳細な分析に示されたような、「その人の肉体と生活の、動作の組合せ (group of actions) のためのゆとりを含めてのフィットでなければならぬ」[DEARBORN 1918: 13-24] という意見、あるいはデザイン論者の Hillhouse の、適切なフィットとは、「胸、腰そして腕まわりが、滑らかな動作のために窮屈でないような十分のゆるみをもってからだに添う」[HILLHOUSE 1963: 95] という意見を、穏当なものとしてうけいれる。けれども Cunnington の指摘、あるいは1890年代の裁断師たちの妥協的な諸発言その他の証拠を考え合せると、今世紀に入ってからなお、より密着的な構造をフィットと考える伝統が、つよく残っていたのではないだろうか。前に紹介した Tomlin の、city coat と West End coat の区別につい

62) Rivkin は、“本質的にイギリスの産物であるテラーメイドを、イギリス女性以上によく着こなせる女性はいない”と書いた [RIVKIN 1926: 26]。

ては Holding も、ロンドンではからだにぴったりした衣服を“city fit”といって、West End でもとめられるスタイルではない、と説明しているが、そのことは、歓楽街であり、新しいファッションの生れる場所であるウェストエンドと、保守的なシティとのちがいでであると理解できる。すなわち、タイトフィットこそがフィットの伝統なのだ<sup>63)</sup>。

さて、フィット性の中心に、こうしてタイトフィットへのつよい意欲が歴史的に存在するとして、そのフィットがからだのどの部位についてのことなのかはなお残る問題である。衣服がからだに密着するといっても、からだのすべての部位に、おなじように密着することは人体工学的にありえない。Holdingによれば、フィットにたいする感受性は、男性と女性とでは微妙に異なり、女性は胸部以外のあらゆるからだの部位に、衣服を感じていなければ不満足であるのにたいして、男性は正確すぎる裁断をのぞまず、より自由さが必要であるという [HOLDING 1890: 54]。このことばを仮りに正しいものとして、これと Sladdin の主張—衣服造形の主要部分は、男性は肩、女性は胸 (bust)—(66頁) とを重ね合わせると、男性服におけるフィットは、衣服全体の中の比較的限られた部位であって、着る人の肉体と生活の group of actions の解放感を妨げないところ、上衣についてのみいえば、それは肩から背中にかけてではないかという、可能性が考えられる。Holding のことばで、一見矛盾のよううけとられる点は、テーラリングが、とりわけ男性服を中心に、その技術的発達をみたにもかかわらず、男性がよりフィットをのぞまない、という点である。フィット性にたいする着る人の拘束感、感覚的というよりも心理的な面がつよいものであるから、このことばについてはその方面からの検討も必要であるが、矛盾にたいする答えのひとつの鍵は、おそらくフィットの部位の問題であろう。つまり肩から背中にかけては、胸・腹部に比較して、肉体の平常時での圧迫感の弱い部位である。したがってこの部位に衣服がよくフィットしたとしても、胸から裾へのゆるみが十分で、しかも前方開放の jacket タイプを着刷れている場合、よいテーラリングで仕立てられていることは、着る人の着易さの実感と矛盾しない。

体形へのフィットと関連する西欧衣服のいちじるしい特色のひとつは、しわを嫌うことであろう。しわ、あるいはひだは、フィットの悪さをあらわすゆるみとして、こ

63) 1890年代の直前の時期の文献には、タイトフィットのプリンセスドレスの高貴な美しさを讃える文章が眼につく—[OLIPHANT 1878: 69, 70; The Lounger in Society 1881: 178]。しかし今世紀に入っても、タイトフィットを基本とする考え方はつづいている。“ファッションの変化がいかに早くても、からだの曲線にぴったりと添うことが、すべての基本作業である” [CARLISLE 1902: 7]、“ルースフィット (ソフトウェスト) ドレスは、女性の生れながらの優雅なからだの線をかくすことになるので、美しいかたが台なしになる” [DOOLEY 1930: 55]。

れを割合神経質に斥ける傾向が、西欧服観の一面にはあった<sup>64)</sup>。このことと、ドレーパリーの愛好とはどうむすびつくのか。おそらく、感覚的価値観にもとづいて、意図的にデザインされたものと、偶然的な発生との差、とすることはできるであろう。西欧服装における広義のひだづけ—shirring, smocking までをも含めて—には、もともと余分な布の（やむをえない）処理法であるとか、縫製時の布のたるみ、つれと区別のつかないものも多いはずである。そのような布面の結果を、気に留めない段階と、それを批判、観照の対象にのぼせて、あるものは全く排除し、あるものはデザイン化するという岐路が、Ⅱ期の期間を通じてつくられたといえそうである。Evans は11世紀の手写本の観察にもとづき、素材のしわ寄せ飾りの存在を指摘し [EVANS 1952: 5], Quicherat は12世紀には1本のひだにさえきびしい美的要求をだす態度が生れてきた、としている [QUICHERAT 1875: 252]。中世末期の状況について Boehnは、いまや完全に処理されたひだが重んじられ、浮いた状態のままにされておかれるのではなしに、しっかりと縫いとめられた、と [BOEHN 1932: 198]<sup>65)</sup>。

しわ、ひだにおけるこうした指摘は、まさに定型化、硬化の方向についての言及にほかならない。しかし布地は現実には石や木のような硬さをもつものではないし、人が着た衣服が、動きをまったく失っていることもありえない。したがって和服を基準としてみたときのような、定型化、硬化という認識ないし自覚は、西欧人にはわれわれほどには存在しない。それでも、西欧衣服のこのふたつの傾向は、他の方面から言及されている<sup>66)</sup>。

よい服の条件として、19世紀から20世紀はじめのテラーたちのあげるのは、フィットのよきにつづいては、よいプロポーションないしバランスである<sup>67)</sup>。フィット性とプロポーションとは、すぐれたテラリングの、2大条件だったといえよう。プロポーションの問題は身体観と関わらないわけにはいかないので、前項につづいて、われわれはもういちどの問題を、やや別の観点からとりあげよう。

64) 14世紀の達成として、1本のしわ (pli) をもゆるさない技術とその美を指摘した例—ENLART 1916: 74; QUICHERAT 1875: 252; PITON 1913: 4.

65) あわせて、しわを除去する方法についての言及もいくつかなされている。QUICHERAT [1875: 147], HARTLEY [1930: xiii] はアイロンでの、NORRIS [1927: 222] は板締めによる、ENLART [1916: 74], DOES [1975: 26] は詰めものによる。

66) 衣服や布のやわらかさ、動きの讃美が西欧人の古代服装、また非西欧服装の認識の中にみられる。たとえば、HILLHOUSE 1963: 46; BALDT 1916: 61; STEELE 1892: 70. なお、西欧人の古代ドレーパリー讃美に関しては112頁参照。

67) 19世紀前半の例—BYFIELD 1875: iv; WALKER 1840: 5-8; WALKER 1844: v; WOOD 1847: preface.

私は前項では、からだのかたちをたいする西欧人のつよい執着を指摘した。それをより具体的に、とくにプロポーションの点から言及した諸家の発言を整理してみると、からだの部位についての、特色のある見方が浮かびあがってくる。それは西欧人が、人体を各個別部分のブロック的な組合せのように、見る見方のあることである。プロポーションという観念自体が、そのことにもとづいていると考えられるが、この点については Cunnington が、そうした区分構造 (segmented structure) — 人体をひとつの全体としてでなく、各部分のむすびついたものとみる衣服構造 — が、14世紀に始まる、と言っている [CUNNINGTON 1948a: 49, 50]。彼はここに、西欧服装におけるウェストラインの発見と、“下肢の解放”を見るのである。われわれが中世の写本挿絵の人物画で見る人物の、ブロック的身体描写は、衣服における区分構造の、長い前駆段階ということになるのであろうか。

このような身体・衣服観についての言及の早い例は、Renan のそれである。彼は、14世紀のフランスにおけるあたらしいファッションとして、身体の各部分にぴったりした衣服を着、それまでは知られていなかったエレガンスなやり方で、身体のかたちを“découper”した、とのべている [RENAN 1890: 107-]。彼のいいかたはいくぶんあいまいで、またかならずしもそれが、西欧的特色と、言っているわけではない。これにたいして、ほゞおなじ時期に Steele は、北ヨーロッパ諸国の衣服観を紹介し、腕の機能を示すために、肩関節を強調することの、デザイン的な意味を説いている [STEELE 1892: 152]。Steele は最後の部分では、上のような関節衣服 (articulation dress) よりも、古代ギリシャ衣服のように、全体が1部分である衣服の美の方を推賞しているのであるが、1892年という時期を考慮すれば、Steele が西欧の衣服の伝統的特色をそうした関節衣服に見、かつそれに立ちむかう姿勢の意味も納得されよう。その後デザイン論者の Baldt にも、立場はちがうが衣服の区分(接合)構造といった表現がみられた [BALDT 1916: 61]。けれどもとりわけ、西欧衣服のこの特色が云々されるようになったのは、第2次大戦後のことであろう。

まえに紹介した Cunnington につづいて、Šroňková は、むしろ初期中世の女性服における、ブロック風特性を指摘した。彼女はそれを、構造をより堅固なものにするための、機能的理由によるものとし、同時代の建築にも共通する、時代精神とも関連づけている [ŠROŇKOVÁ 1954: 22]。比較服装論で著名な Hansen の場合は、そのような構造的強調を、Šroňková とちがって、服装におけるゴシック・スタイルと考える [HANSEN 1972 (1956): 122]。また、Newton は、袖を体幹から分離させて、衣服全体をそれぞれ独立した3つの部位からなる、ユニット構造とすることが、1340

年のニューファッション、としている [NEWTON 1980: 3]。

ところで、以上紹介した意見の中にもすでにあらわれていたように、人体あるいは衣服を、ブロック構造とみることは、ブロックとブロックの接合箇所の認識、さらに強調につながるのである。Cunnington がウエストラインの発見と言ったのは、ウエストのくびれが、上体と下体の境界を明確に示し、プロポーションの観念自体もまたそこから生れてくるという、画期的な問題を示唆しているのである。

Does は、“憧れの細いウエスト”の獲得をもって、文明と非文明とをわけるが如き口ぶりである [DOES 1975: 22]。また、細いウエストは女性だけに望まれているのではなく、男らしさのあらわれとして、エジプト以来重んじられてきた、ともいわれる [BINDER 1958: 191]。しばしば細胴は、女性の繊細さを強調するがための特異な偏執とみられるが、重要な目的は区分性にあったことになり、その目的において、胴と肩とはおなじ意味を担ったわけである。

とりわけ、男性の場合は肩に、女性の場合は胴部が強調されたことになる。Does はこの2つの強調点をテーラーの発生を分析する中で論じ、男性は *mahoitres* (fr.) を常時着るようになり、それによってふくらんだ袖の支えられたことを、多くの造形作品を根拠に指摘している [DOES 1975: 26-28]。

肉体をブロックとしてとらえ、さらにそれぞれの部分を強調する態度は、フィットの観念について、あたらしい視点を提供する。私は旧稿の中で、「彼らの正しいからだのかたちという観念は、ひとつには構成の明確さ、すなわち袖は袖、胴部は胴部という境界の明瞭さを意味する」とのべ、それにたいして和服は、「衣服のある部分がある時点では肉体のAという箇所に当たっていても、着る人の状況が変わったべつの時点では、多少とも距離をもったBという箇所に当る」とものべた [大丸 1983: 799]。この点をよく示すのが、前方開放タイプにおいて、ボタンで固定するか、帯をしめるかの違いである。身体のある箇所と、そこに適合するように設計された衣服のその箇所とのずれを、どの程度まで許容するかが、フィット性のひとつのとらえかたであろう。この点を重く見て、西欧衣服へのボタンの一般的導入の意味を指摘したひとりが、Broby-Johanson である [1966: 120]。しかし、その分析は十分とはいえない。

なおここで、西欧型衣服の主流である非前方開放タイプ円筒衣の密閉性について触れたい。日本人が西欧服を“窮屈袋”と感じた理由は、これまでのべてきたその部分密着性以上に、密閉性であったとおもえる。しかし西欧人自身が、歴史的観点からこのことに考え及んだ例を、私は知らない。密閉あるいは被覆と、開放あるいは露出

の問題は、健康に関連するテーマとして、今世紀はじめに盛んに論じられるようになる。Graterle は、Montaigne の勧めをひいて、健康のためにはできるだけ身体を覆わないようにと主張している [GRATEROLLE 1897: 121]。この考えは、そのもっとも穏健なかたちとしては、イギリスを中心とする1929年以降の、“Men’s Dress Reform Party” に、もっとも急進的なかたちとしては、北ヨーロッパ諸国の Nackt Kultur の運動に展開する。しかしそれらのことは、すでに衣服デザインの問題を超えているのである。

一般に造形行為における、“近代化”のひとつの傾向として、外観としての脱装飾性、単純化がみとめられる。脱装飾性、単純化は、構造主義と表裏をなすものであるが<sup>68)</sup>、西欧衣服において、上記のような、一種の構造主義志向が見られはじめたことは、脱装飾精神への道を、ある程度は開いたことになったはずである。ところが、現実には15、16世紀はもっとも過剰な装飾の時代であった。西欧服装がはっきりと構造主義的単純さの道に踏みだし、かつそれを自覚したのは19世紀になってのことである<sup>69)</sup>。そのひとつのあらわれは、衣服におけるラインの認識であろう。「理想的なsuitsの規範となる原則はアウトラインである」[WALKER, ISSAC 1885: 118]<sup>70)</sup>。ただしDooleyによれば、ラインということばと同義に用いられていたのが silhouette で、前者は主として業界の用語だったという [DOOLEY 1930: 82]。このシルエットの方は、周知のように18世紀末から使われていたので、衣服を線で認識することは、これも西欧衣服観の流れのひとつであったといえるのではないだろうか。今世紀になると、「色や素材よりも、今やラインが重要」[VALLÉE 1925: 3] といった発言をとくにとりあげる迄もなく、単純な線の感覚的価値感による衣服の評価は、常識となっている。

西欧におけるこのような構造的な衣服認識は、つねに身体観との密接な関係のうえでときとしては身体観そのものとして保持された。したがってよい服装はつねに正しい体形、正しい姿勢を前提とするとし、各時代の作法書はそうした教訓を怠らなかった。18世紀初期の作法書《The Rudiments of Genteel Behavior》の中でも、頭を正

68) “装飾が人体の構造感を妨げたり、あいまいにしたりしてはいけない” [STEELE 1892: 149, 150].

69) 同時代の観察としては、“最近男性のファッション(とりわけコート)は非常にプレーンになった。そしてそれが彼のからだにいかにかにフィットしているか—あたかも、彼がその中から生れたかのように—についての関心がつよい [PENDLETON 1843: 230]。Godkin は単純・画一化の理由として、忙しい男たちにとっての時間の節約、と言っている [GODKIN 1867: 418]。

70) 多少意味はちがうが、ラインという表現は、やはりロンドンのテーラーによって1844年にも用いられている [WALKER, W. E. 1844: 23]。



しい位置におくことが、立っている時も、歩くにも、踊るにも、その他すべての動作に、優雅でやわらかな、かつ礼儀にかなった振舞の前提、とある [NIVELON 1737: 2]。その100年後の作法書でも、ドレスのもっとも重要な点は、落着きのある優雅な態度である [Agogos 1834: 99]、というなど、つねに衣服を着た人間、あるいは人間の着た衣服としての、ダイナミクスのうえでの衣服観が根底に存在したのである。

衣服を、全体としての、あるきまったかたちでとらえること、そしてそのかたちに、創造的意欲と、感覚的価値をみいだすこと、それらのことが、2-4 で私の言った、定型性に該当する。

この第Ⅲの段階において、西欧型衣服が“身体的”であるということの内容は、身体密着的であるとか、そうした意味での体形的ということとは違う。Hamare が、「西洋服装は体形とは無関係に発展してきた。もしそうでなければ、衣服のスタイルが、さまざまに変化したことの説明がつかない」と言っている [HAMARE 1978: 10] のも、この点をさすとおもえる。

また、私は前の部分で、西欧衣服の、身体の部分部分への適合の重視を指摘し、そのためにボタン式の固定留め具の役割をのべた。ここで再び、その問題をとりあげる。部分適合性とは、たとえば、衣服のバストトップとしてデザインされた箇所が、身体の乳頭に正しくあたっていることであり、衣服のショルダーポイントとしてデザインされた箇所が、身体の肩突起に正しく載っていることである。西欧衣服におけるフィットとは、デザイン上の概念であって、生理的な身体密着ではなく、厳密にいえば、サイズとも無関係である。

定型性にとまなう硬構造的性については、技法上の問題としての、いくつかの指摘がある。ギャザーやプリーツが、裏地やファウンデーションに縫い留められて、今日いう cartridge pleats になったのが、15世紀後半という Houston の指摘 [1939: 141, 145]、コルセットが一般的でなかった時代でも、芯地を用いて、ドレスに同じ効果を与えようとした、という、Laver の指摘 [1963: 36] など。

そしてこの定型性の獲得が、すでにのべたように、ファッション生成のひとつの条件となったのである。今回私が問題とした、西欧服装の諸特質の中ではただひとつ、もの自体ではない鍵であるところのファッションについて、以下、西欧人の認識の内容を検討する。

\* \* \*

ファッションについては、専門外のひとびとの関心もつよく、さまざまの立場から

バラエティに富んだ発言があった。今回の対象文献の中でも、ファッションへの言及はすべてのカテゴリーにわたっている。ファッション論がこのようにひとびとの広範囲な関心の対象であるため、私の選んだ9つのカテゴリーにおける意見は、専門的知識には裏づけられてはいるけれど、全体からみれば、むしろある“偏向”のあらわれていることは否定できない。それはひとことでいえば、いくぶん主知主義的で、大衆からみれば覚めた態度となっていることである。以下その点を前提としたうえで紹介しよう。

ファッションに関する西欧人の見方を分析するにあたっては、このことばについての、日本語の“流行”、“はやり”とのニュアンスの差の検討からとりかかる必要がある。日本語の流行は不易と対照され、変化の中の一時的な好み、雷同現象のようにうけとられている。したがって仮に日本流行服装史というものを考えるとすると、服装における日本事件史といったひびきがある。流行的現象といえども因果関係の論理からのがれることはできないが、その現象自体は継続性、安定性をもたない。服装の場合、流行と対比される概念に風俗がある。風俗の変化は流行にくらべるとより安定的であり、民族的生活様式といったものに近い内容をもつよううけとられる。これにたいして fashion あるいは mode の概念は、流行にくらべてその使われ方がいくぶんあいまいで、多義的といえる。

ファッションを流行とほぼおなじ意味に用いる場合―“短い期間、大衆の共有する好み” [CUNNINGTON 1948a: 6]―ももちろんある<sup>71)</sup>、それは基本的な考え方であるのだが、西欧語でのファッションやモードは、スタイルとの区別があきらかでない。たとえば Norris は日本語の流行にあたる概念をあらわす場合、“fashion in vogue”といったいい回しをしている [NORRIS 1927: 353]。しかしとりわけわれわれに印象的であるのは、たとえばなせ女性はおしゅれに関心が深いか、という設問を、西欧人の場合であるとなせ女性はファッションに関心が深いか、という言いかたになる傾向があり、心理学的服装論においてとくにその例がみられる [HURLOCK 1929: 34-37; FLÜGEL 1930: 135-139; PRICE 1936: 178]。ファッションがスタイルの意味に接近する結果、とくに短い期間のファッションを意味するための別のことば、たとえば fad であるとか、craze であるとかいう言い方が用いられる。このことばがむしろ日本語の流行に近く、そのためにかえて日本語では、これらを意味する適切な

71) おなじ理解の範囲にはいるが、英語圏での考え方のひとつとして、モードはより創造性のあるもの、ファッションはそれが大衆化したもの、という区別の仕方があった [STORY 1930: 390]。これはパリモードととくにアメリカの大衆むけ既製服との関係という現実が、外来語の解釈に反映したもので、わが国ではとくにうけいれられた区別である。

ことばがないのである。

ファッションとスタイルがまぎらわしい用いられ方をしている点については、じつは西欧人自身はその自覚をもっていて、Bell は、“ヨーロッパ人の服装の洗練という観念は変化の観念と結びついているので、ファッションナブルということばを離れて、身なりの良いひとの着ているものを描写することができない。chic や stylish もまた、変化のプロセスを暗示する”と指摘している [BELL 1947: 21]。このことは、fashion (Eng.) la mode (fr.) の語源的分析からも、いえることであろう。逆に日本語には、装いのみごとさを賞めるファッションナブル、modish にあたるニュアンスをもつ、適切な言葉が見当たらないのである。

ファッションがスタイルに近い意味で用いられるために、たとえば身体変形の習慣に関する民族誌的敘述も、その土地、種族のファッションとされることもある [FLOWER 1881: 3; MARINUS 1941]。

ファッションと流行との差異のもうひとつの点は、後者がその現象を一過性視するニュアンスをもつのにたいし、ファッションはその点もあいまいであり、理解に幾分幅の広さがあることであろう。このことはファッションがスタイルに近い意味で用いられる以上、当然のことではあるが、もうひとつの背景は、一般に変化に伴う進歩の観念、ないしはその可能性という、文明論的論議が、ひとびとの意識の中にあつたためではないだろうか。その結果、ファッションは進歩や改良などではなく、単なる変化にすぎない、という見方、あるいは単なる変化にすぎないものも、そうでないものもある、という、折衷の見方など、好意的な、また攻撃的な諸説にわかれた [GODKIN 1867: 419; PLANCHÉ 1900: 79; AUBERT 1957: 119; DOOLEY 1930: 82;]。この問題はこのあとで触れるファッションの起源やその法則とも関連するのであるが、一般にファッションに敵意を示す論者には、ファッションとはある様式の極端に誇張されて行き着いたところ、という見方をする人が多い [HAWEIS 1879: 26; GRATEROLLE 1897: 112; TAILORS 1796: 7]。Cunnington もまたこの意見にちかい [1948b: 18]。さらに、より一般的なファッション批判説が、その没法則性—気まぐれを指摘していることは改めてここでいう必要はないだろう。ただし、一步譲って、ファッションの中には、美的法則に従うものと、単なる気まぐれの2つの種類があると、説く論者もある [SAGES 1926: vii]。

つぎに、ある程度ファッションの内容にわたっての意見をとりあげたい。定義自体があいまいなままで、ファッションは以下にのべるような議論が中世以来つづけられてきたのである。まず、ファッションが西欧世界においてはいつはじまった現象か、

という点では、今回対象とした文献の著者たちの見方はつぎのようである。

- 12世紀 SCHOFIELD 1974: 17  
 14世紀前半 BOUCHER 1965: 192  
 14世紀半ば SICHEL 1977: 7; DORNER 1974: 12  
 14世紀末 FOLEY 1893: 464; BOEHN 1932: 215; BALDWIN 1937: 9;  
 LAVER 1969: 62; DORNER 1974: 12  
 15世紀 ŠROŇKOVÁ 1954: 137<sup>72)</sup>

諸家の見方が、14世紀末を中心としていることがわかるが、これはまさに私のいうⅢ期、すなわち西欧衣服の定型性獲得にともなうその成立期と一致する。私はすでに、定型性とファッション性との必然的關係については指摘した(68頁)。それにちかい意見としては、Dorner がつぎのように説明している。“ファッションが次から次へと衣服の形を変化させてゆくことであるとすれば、からだに衣服をフィットさせる技術が前提であるので、その技術の成立期である14世紀の中ば以後、ファッションは生れたことになる[DORNER 1974: 12]。

ところで西欧には、ファッションとはヨーロッパ的現象であり、非西欧圏では、ファッションというものは存在しないか、あるにしても非常に緩慢で、強い支配力ももってはいない、という見方があった<sup>73)</sup>。西欧人のキモノ観から裏がえしされた西欧服の自覚のひとつとして、ファッション性が含まれたのも、まさにそのためであった。それでは一体、ファッションの生れる条件とはなにか<sup>74)</sup>、そして非西欧圏ではなぜそ

72) 国別に時を分けた場合は、西欧全体という意味で、早い方の時代を採った。

73) CAROTHERS 1879: 23; WALKER, I. 1885: 27; DOBSON 1954: 14; KNAUER 1978: 21; HURLOCK 1929: 34-37; HEARD 1924: 71; LANGLEY-MOORE 1949: 1; DOOLEY 1930: 124; DIOSY 1898: 235; RITTER 1904: 56, 57; KNOX 1905: 230; CHAUVELOT 1923: 90; GIAFFERRI 1927: 1.

74) ファッションはどのようにして生じ、なぜわれわれを支配するかについても、肯定的見方と、批判的見方とがある。しかしその多くは結局、ファッション自体への嘆息ほどには、自己嫌悪のニュアンスはない。

\* 個人性、個人の多様性、そしてその自由の主張—ŠROŇKOVÁ 1954: 13; LANGLEY-MOORE 1949: 6; BROWNELL 1904: 235.

\* 女性の地位向上による—CONTINI 1965: 76.

\* 変化が異性を惹きつけるため—Maroñon 1971: 22-42; FLÜGEL 1930: 135.

\* 都市的現象あるいは都市の自由さ—BOEHN 1932: 215; KNAUER 1978: 21.

\* 社会段層の不安定、向上心と競争心—BALDWIN 1937: 9; BELL 1972: 76; HAWES 1879: 26; FLÜGEL 1930: 139.

\* 民主的、進歩的社會、文明社會—HURLOCK 1929: 34-37; FORESTER 1925: 25

\* 美の基準喪失のため—BALDWIN 1937: 9.

\* 企業のうみだすもの—PARTON 1869: 544-546.

れが育たなかったか<sup>75)</sup>、という問題に関しては、社会心理的とらえかたにのみ終始し、ものとしての衣服様式からの理由づけは、ここに引用した Dorner のそれ以外、見当たらないように思う。

西欧社会にはファッションがあり、非西欧—中国あるいは日本にはそれが見られないか、ほとんど目にたたないほどの変化である、という意見にたいして、西欧人と接近しはじめた当時の日本人の中には、むしろ逆の見方をするひともあった [石沢 1922: 102-113]。一般に、ひとが理解の浅い対象をまえにすると、知悉した対象にくらべると、内部的な個々のものの差異がつかみにくいのがふつうである。しかし今世紀のはじめに、日本人が西欧服を見て流行がないから経済的と言い、西欧人が和服を見てファッションブルでないと言ったのは、それぞれ別の理由もあったかと考えられる。まず西欧人が和服を見た場合、彼らは形態上の変化のみに、あるいは非常に大きな関心をその点にとくに注いだにちがいない。和服のスタイルの変化が模様中心であることは、やがて西欧人もそのことに気づいてゆく。「外人にとってキモノのファッションパレードは絵の展覧会に似ている。なぜならそのファッションは模様によって生まれ、衣服の裁断ではないから」[Lajtha 1936: 175]<sup>76)</sup>。模様および素材の変化への敏感さと、そのめぐるしい流行性も、西欧人にとってはファッションの副次的要素としかみえないが、定型衣服と、素材順応系衣服とでは、ファッションのありかたもちがうはずである。衣服と衣生活を構成する要素の、どの部分がより変容しやすく、どの部分が安定的であるか、そのこと自体、文化的特質とは考えられないだろうか。

反対に、日本人が西欧服を見て、流行にも変化にも乏しいと判断したのは、その時代の日本人の経験していた西欧服が、男子のフォーマルウェアとビジネススーツとに、ほぼかぎられていたためである。

19世紀中期以後の西欧男性服のスタイルの安定は、さきに紹介したファッション原因説をふくめてのファッション理論の多くにとって、説明のむずかしい矛盾になってきた。良いものでさえあれば、バラエティは必ずしも必要でない、すなわち一種の男性服装完成論 [Parton 1869: 544-546; Godkin 1867: 418] さえ、19世紀の一

75) 非西欧国の非ファッション性の理由は、西欧国でのファッション生成の裏がえしであるが、より具体的には、つぎのような見方が示される。服装がつよい標識性をもち、その背後に固定的な身分制度、社会構造があるとの見方 [Hurlock 1929: 34-37; Flügel 1930: 135; Knauer 1978: 21]、視先崇拜、伝統尊重の念があつく、変化を好まない [Walker, I. 1885: 27; Dooley 1930: 124]、社会構造の単純さ [Knox 1905: 230]、貧しさのため [Ritter 1904: 56, 57]、とくに中国人の場合、変化よりも洗練や完成への欲求がつよい [Heard 1924: 71]。

76) 同様の趣旨 [Garis 1937: 104]。

部のテーラーの筆先にかいまみることができる。奇妙といってもよいだろうが、夥しいファッション論の多くは、ファッションは美とも、良い趣味とも無関係であるという<sup>77)</sup>。またファッションは知的なものとはいえ、むしろ制服的な服装の方が、合理的であるといった見方 [GRATEROLLE 1897: 112; FOLEY 1893: 460] もある。結局のところこれら19世紀とその後のファッション論は、制服的な“定型的”服装の立場から、多かれ少なかれ冷たい眼で女の世界を見た、男の側のファッション批判ともいえよう。

ファッションが西欧衣服の特質のひとつ、という点からいえば、19世紀中期以降の男性服装のこのような形態上の非ファッション化は、西欧服装における脱西欧化の、さいしょのワンステップであったのかもしれない。

77) もっとも有名なもののひとつは、Alison のアソシエーション説における 相対論 [ALISON 1790: 364-372], その説をうけ、美とは無関係と言いきる WALKER [1837: 7], 美の基準が失われたことによって、ファッションが生れたとする BALDWIN [1934: 9], そのほか [Thought fullness 1868: 282, 293-295; CUNNINGTON 1948b: 38; VALLÉE 1925: 25]。